

増補生寫朝顏日記

目録

- 大内館の段
- 松原の段
- 宇治の段
- 真葛ヶ原の段
- 岡崎の段
- 明石船別れの段
- 弓之助家敷の段
- 大磯揚屋の段
- 小瀬川の段

一 六 八  
二 十 六  
三 十 一  
三 十 五  
四 十 六  
六 十 四  
丁 丁 丁 丁 丁 丁

七十一丁

七十七丁

九十二丁

百一丁  
百八丁

百二十四丁

百二十六丁

- 摩耶が嶽の段
- 摩耶が嶽の段(三段目の切)
- 濱松の段
- 宿屋の段(口)
- 宿屋の段
- 歸り咲吾妻の路草
- 駒澤上屋舗之段
- 増生寫朝顔日記目錄畢

増  
補  
生  
寫  
朝  
顏  
日  
記

作  
者  
山  
田  
案  
山  
子  
遺  
稿

翠  
松  
園  
主  
人  
校  
補

○大内館の段

名妓紅拂ハ李衛公が英雄を志たひ玉翠蓮ハ張君瑞が才情をあへれむ  
淫奔痴情と笑ふ人有といへ共立通したる操の誠美玉の瑕を隠しつべ  
し爰々鎮西の探題大内多良之助義興公祖父の家督を請繼で防長豊  
筑の太守とし武威西國又輝けり去頃より義興ハ鎌倉又在番有本國又  
ハ後室園生の方女ながらも一國の政事を預る才智發明折しも禁庭の  
詔使玉橋の局はるゝ周防へ下向あれば饗應の役目山岡玄番之允邪  
惡を包む衣服の綺羅相役駒澤丁庵ハ一家中の儒學の師範四角四面又  
四方髪道を守りて相説る玉橋の局威儀を正し此頃中宮御所御不例又  
つき先格の通り當家の先祖林聖太子より相傳る天竺著婆が所持の藥王  
樹を以病床又掛置せられたし逆暫時借用のに使を蒙り局司玉橋勅書

を賜ひつて下向せり拜見の上寶を早々差上られて然るべしとぞ述ら  
る。後室はつと手をつかへ家督義興の鎌倉在番の留守中なれ共等閑  
ならぬ中宮様の恼家老中と得と評定の上勅答ナシ上ベしと仰せの  
下を駒澤了庵、何さま禁庭の勅命輕からざれど、やまと大切な國の寶、  
一應鎌倉へ急使をたてし通達の上と云せも果す玄番之丞、出過たり  
駒澤、國家老たる某をさし置是非の裁配片腹いたし、今又も玄れぬ恼  
をペべんくと鎌倉迄問合せよ遣へし、若其内又は登霞有べ違勅の科  
ハ何所へかしる馬鹿者の思案間よや合ぬと權威を甲みやり込まれば、こ  
ちへぬ了庵膝立直し、國家の浮沈よかしるは寶、念よ念に入る某忠義の  
道よ遠慮へ致さぬ、殿の目鑑をもつて、儒臣たる拙者を馬鹿者といふ舌  
長なりと既又珍事よ及べん氣色園生の方押なだめ、兩人共院使の前  
なるぞ、私のあらそひ無用と制し止めて局よ向ひ、勅諭の趣き畏り奉り

ます寶藏より取出し、とくと改め差上る迄、奥の亭まで暫く休足す、早速の領掌、神妙く、一時の間も知がたき君の懶違背なく差上られよど、詞すくなみ云渡し局の「立て入」けり、園生の方兩入と打向ひ、勅命と有べ違背も成まじ自の薬王樹を改む局様へ差上ん併我子義興事、うすく聞バ鎌倉よて遊所通ひ諫言する程の者を手討とする、家老冷泉帶刀を越、何卒本心と立歸り早々歸國召る様計ひ頼と有ければ、駒澤了庵頭を下尤の意、お聞よ達せぬ其内と家中の内器量を見立、幾人となく諫言よ遣ひせ共皆手討になざるしゆへ、只今ハ誰有て参る者もいへず某が一子祥一郎とす、幼少より我儘放埒ゆへ勘當仕る、又一人の甥宮城阿曾次郎とす者、若年ながら一器量ある者兼て拙者が跡目、彼よゆづり度念願、此義に免有よおいて、早速呼下し鎌倉へ之諫言よ遣し、さんと願へば玄番嘲笑ひ、「ハ仰ろしい諫言呼ひり、い

まだ籠中、逆もなき我君、勤仕のお氣晴し折節の遊興へとの大名  
 よも皆有事夫々何ぞや、今も山が崩る様度々謊言すがゆへ却て  
 お氣が逆立ての手討其儘打やつて置が上分別とさしゆる心の下巧  
 園生の方引取て、豊前の大友滅亡の後其殘黨當家の隙を窺ふ者  
 少からず蟻の穴より堤の譬義興が放埒打捨置いて、將軍家の答も計  
 がたし、了庵が願より任せ阿曾次郎とやらよ家督少付る間早々呼よせ鎌  
 倉へ遣へせよ、玄蕃之丞の局様のむらてなし、此後逆も私の遺恨を差  
 はさまず、家の長久頼むぞやと、物和らかよ言渡し、入せ給へば駒澤山岡、  
 はつとお受へやせ共心隔つる忠不忠、玄蕃は奥へ了庵、屋敷をさして  
 立歸る、既に其日も入相のたそがれ時の暗紛れ庭の古井をぬつと出、傍  
 を見廻し呼子の笛相圖と見へて山岡玄蕃、一間を立出見合す顔、玄蕃様  
 ヨリヤシ音高し赤星運八、シテ首尾の何とく、ハアお氣遣ひなされますな寶

藏へ忘び込盜取たる靈符の尊像<sup>れいふ</sup>、お請取と差出せば、出かいたく。  
レ當座の褒美<sup>ほめい</sup>と懷中<sup>くわいぢゅう</sup>を取出し渡せば、取て押いたゞき<sup>おしおき</sup>、添い此上<sup>こじょう</sup>に兼<sup>かね</sup>  
て申合せし通り、鎌倉へ立越何かの様子<sup>ひがた</sup>の跡を申上ん<sup>まげ</sup>、いかにも岩代  
多喜太と心を合せ、大内之助を馬鹿者<sup>ばかもの</sup>と仕立上<sup>あげ</sup>、將軍家より咎<sup>とがめ</sup>の来るや  
う、殊<sup>こと</sup>駒澤了庵めが甥<sup>おい</sup>とやら、近<sup>ちか</sup>諫言<sup>けんごん</sup>下る様子、必共ぬかりなき様<sup>よ</sup>  
子<sup>こ</sup>からくとさしやけ<sup>は</sup>、委細承知仕る然らば此儘拙者<sup>のむじょ</sup>の暇<sup>ひま</sup>、家  
中の者に見付られぬ様忍べく<sup>ひそむ</sup>、又運八<sup>は</sup>うなづきく<sup>ひそむ</sup>、氣をくぱり表  
をさして忍び行<sup>ゆ</sup>、玄番<sup>げんばん</sup>に寶懷中<sup>くわいぢゅう</sup>へ隠す間もなく奥の方<sup>うち</sup>に立ぞふと口  
も<sup>も</sup>呼<sup>ひ</sup>る聲<sup>こゑ</sup>、鉢<sup>ひち</sup>乗物<sup>のぶつ</sup>に庭先へかきすゆれば、早<sup>は</sup>に立<sup>たつ</sup>と館の後室園生  
の方玄番もろともひれ伏<sup>ふ</sup>べうやく<sup>ひそむ</sup>しくも藥王樹<sup>やくおうじゆ</sup>を袖<sup>そで</sup>よさしげて玉  
橋<sup>たまばし</sup>の玄づく<sup>ひそむ</sup>一間を立てる、園生の方玄とやかく手をつかへ、お局様<sup>おくるわ</sup>  
の遠路<sup>とおじ</sup>の下向<sup>おもむき</sup>苦勞<sup>くろう</sup>も存じますと、敬<sup>うやま</sup>ふ詞<sup>こと</sup>と局玉橋<sup>おくるわたまばし</sup>、見送り太儀<sup>おおぎ</sup>、いづ

れもさらばと夕ばへの胸の善惡白綾も雲々色ます緋の袴かゝげて移る乗物を、早かき出す仕丁共列を揃へて出て行

### ○松原のだん

周防の國山口へ北よ嶺岨の山をひかへ、南へ名高き大灘みて多羅の濱へ打寄る波風あらき小松原、夜も早初夜よちかづけど、宿りさだめぬ野伏りの、こも引かぶりあたりをながめ、つくべ思へば我身ほど淺ましいものがあらふか大内の家老馳澤了庵が一子共云れし身が我ましゆへよ親の勘當何卒一つの功を立、それを士産又歸參の願ひと思ふ又任せぬ身の不仕合せ、非人と迄落ふれて心をつくすかひもなき淺ましの身の上と、先非を悔み居たりける折しも聞ゆる數多の人音何事やらんとこも引かつぎ木影へこそれ身をひそむ程なく來る供廻り乗物立れば此方を覆面したる怪しの男眼燈てらしちかべとあゆみ寄、お頭

首尾しゆびへと呼よひる聲のこゑ、乗物のりものより立出る、白髮しらがの老女おとめ、あたりを詠よめよが、詞山蛭ひるか氣遣きやりひ玄そらやるな首尾しゆびへ極上ごくじょう、出來あつたくアツヤ、有あと案あわせし迎むかひムカヒ來  
やん玄そらたが、それ聞きて落付おちつけた、片時かたどきも早はう摩耶まやが嶽だへア、コヤ壁かべみ耳みみひそか  
よくシテ元船もとふねへ、多々羅たたらの入江いりえよつないで置おきやんした、そんならそちり、  
手下しも共ともを連立れんたいて先まへへ待まつて居ゐや、何かのふてうは元船もとふねでせふま、合點あてでござ  
さんすシテお頭かしらはま、そろくアツヤと跡あとから行ゆ、早はくアツヤと心得おもてて白丁はくとう着きなが  
ら名なぼしのゆがみ亂みだらるゝ國くにの鼠ねずみども、長柄なが長刀ながた振ふかたげ、元船もとふねさして伴  
ひ行跡あひあひ、老女おとめの玄そらたり顔寶がほ取出だし打詠うちよめ、大内おおうちの重寶じゆほう藥王樹やくおうじゆ首尾しゆびよく  
我手わてよ入いりからは大望だいもう成就じょうごう疑ひひなし、此上こじょうの大内おおうちを亡なし、大友おおともの家名いえな引興ひきおき  
し、其虛きよよつてあひよくアヒヨクバ一天四海いっかんよんかいをお、アと獨笑ひとりわらわして玄そらづアツヤくアツヤ、アと入  
江いりえをまして行形あひあひ振怪ふりあひあひしくも又不敵こかげなり、木蘆きのをそつと以前まへの非人ひじん、立出  
て、跡打詠うちよめ、ハテ怪あやしき老女おとめが今いまの振舞ふるまい、まさしく國家こなを望くわむ曲者くわくしゃ住家すみや

ハ慥々摩耶がだけハテとこしろでうなづきこも脱捨て見へがくれえぞ。  
玄たひ行

### ○宇治のだん

武士の八十宇治川と名ふ流れ底の濁りも友川や、水の緑も涼しげ、風  
吹渡る宇治橋の往来も繁き五月頃螢狩みと来る人の足休めやら氣は  
うしの花香へこゝか一森や貴賤老若差別なくたぎる茶釜の湯氣も立  
名さへ出花の通圓が店の人絶なかりけり、かゝる所へ立派の武士、出家  
伴ひ小竹筒割子肩も打かけ是も又床几をかりの足休め、腰打かけて膝  
ならべ何と月心老拙者國元より京師へ上り儒學修行の内、ふと嵐山よ  
て御意得しが縁と成今で竹馬の友同然あれこれと誘ひも預り、始め  
て見物する宇治の里、山の姿川の流れ、又格別のながめでござる、宮城  
氏の仰の通り袖ふり合も他所の縁も心隔す御申有ゆへ、愚僧も風雅の

友を得て祝着<sup>しちやく</sup>、又存する。是より平<sup>ひら</sup>等院へ參詣し、より政の古跡扇の芝を見せよさん。玄かし斯見晴した景色を題<sup>だい</sup>として一首所望と乞けれど、<sup>間</sup>拙者もあこがましながら、ふと浮んだる一首の口ずさみ、腰折ながら添削<sup>てんさく</sup>と用意の短冊<sup>たんざく</sup>取出し、矢立の筆のはしり書さらくと書認め出せば月心手<sup>ムツコハ</sup>と取上、諸人の行かふ橋の通路<sup>かよひぢ</sup>、肌涼しき風や吹らん、<sup>ハ面</sup>白き此夷曲歌<sup>ひるうた</sup>。古今の本歌を取りしり秀作<sup>しゆさく</sup>、實も涼しき風薰る、友なき字治の夕げしき類<sup>たぐ</sup>ひ有じと打吟<sup>はん</sup>じ、かたへと置べさつと吹、風よまかれて短冊<sup>たんざく</sup>のびらりくとひらめきつゝ、川邊の船へちり込み、月心驚<sup>おどろ</sup>き、是の志たり折角<sup>せうかく</sup>の秀逸<sup>しゆいつ</sup>を風よ取れたり、慥<sup>たゞ</sup>と船取返さんと立を宮城へ引といめ、<sup>ハテ</sup>戯<sup>たは</sup>れの口号<sup>くわうご</sup>に捨置下されふと、留る折しもに座船の内ぞ床しき駁障子<sup>よじやうじ</sup>透間洩來る三味<sup>さんみ</sup>の音<sup>おと</sup>玄たひきて慕ひよるべの蟹<sup>はたた</sup>ばへ妹背<sup>いもせ</sup>かへらで逢夜半<sup>あよよ</sup>を重ね扇の風薰る、匂<sup>にお</sup>ひを玄たふ萬<sup>まつた</sup>かづら、ながき

契やつくも髪<sup>ハテ</sup>聰<sup>コトコト</sup>玄<sup>ヒ</sup>ひ調べ聲<sup>とい</sup>ひ曲<sup>きょく</sup>といひ藝能器量<sup>げいのうきりょう</sup>も揃<sup>ハシマ</sup>ひし美人<sup>ビューティ</sup>  
 ならん<sup>ド</sup>、惜<sup>セシ</sup>むらく<sup>ハ</sup>傍<sup>そば</sup>み居<sup>ハ</sup>て聞<sup>ヒ</sup>ざる事<sup>の</sup>殘念<sup>クモリ</sup>といふ<sup>ム</sup>月心<sup>ツキハ</sup>打笑<sup>ハハハ</sup><sup>ハ</sup>  
 日頃物堅<sup>がた</sup>い貴所<sup>レ</sup>もア<sup>ノ</sup>音聲<sup>おんせいか</sup>よ<sup>ハ</sup>なづまれしなヤそれ格別<sup>かくべつ</sup>先達<sup>も</sup>もナ通<sup>ハ</sup>  
 り拙僧<sup>ハタチ</sup>が和歌<sup>カタカタ</sup>の友<sup>シテ</sup>秋月弓之助方<sup>ハ</sup>へ貴所<sup>レ</sup>を入家<sup>ハシマカ</sup>させヤさんと兼て岫<sup>シロ</sup>  
 置<sup>ハシマ</sup>しが先<sup>ハシマ</sup>も懸望<sup>コンキョウ</sup>貴所<sup>レ</sup>も承知<sup>シヨウジ</sup>近<sup>ハシマ</sup>日<sup>ハ</sup>を見て見合<sup>ハシマ</sup>致<sup>ハシマ</sup>させヤさん、ヤ是<sup>ハ</sup>  
 フたり大事<sup>ハシマ</sup>の法用<sup>ハシマ</sup>をはたと失念<sup>シフネン</sup>致<sup>ハシマ</sup>した無禮<sup>ハシマ</sup>ながら拙僧<sup>ハタチ</sup>、是より直<sup>ハシマ</sup>  
 興聖寺<sup>ハシマ</sup>へ参<sup>ハシマ</sup>り後刻<sup>ハシマ</sup>菊<sup>ハシマ</sup>や方<sup>ハシマ</sup>よて<sup>ハシマ</sup>目<sup>ハシマ</sup>よかし<sup>ハシマ</sup>るでござら<sup>ハシマ</sup>ふ、然ら<sup>ハシマ</sup>べかなら  
 ず旅宿<sup>ハシマ</sup>よて相待<sup>ハシマ</sup>ヤ、先<sup>ハシマ</sup>それ迄<sup>ハシマ</sup>り、おさらば<sup>ハシマ</sup>と、互<sup>ハシマ</sup>よ契約<sup>ハシマ</sup>月心<sup>ツキハ</sup>、寺<sup>ハシマ</sup>をさして  
 ぞ急<sup>ハシマ</sup>ぎ行<sup>ハシマ</sup>、座船<sup>ハシマ</sup>へ障子<sup>ハシマ</sup>引明<sup>ハシマ</sup>ナ<sup>ハシマ</sup>く<sup>ハシマ</sup>、<sup>ハシマ</sup>寮人<sup>ハシマ</sup>様<sup>ハシマ</sup>、まだ暮果<sup>ハシマ</sup>夕<sup>ハシマ</sup>げ<sup>ハシマ</sup>しき<sup>ハシマ</sup>き  
 れいな<sup>ド</sup>と、三味線<sup>ハシマ</sup>止<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>らふ<sup>ハシマ</sup>じませ<sup>ハシマ</sup>と、何心<sup>ハシマ</sup>なく顔<sup>ハシマ</sup>さし出<sup>ハシマ</sup>す舷<sup>ハシマ</sup>よ以前<sup>ハシマ</sup>  
 の短冊<sup>ハシマ</sup>乳人<sup>ハシマ</sup>淺香<sup>ハシマ</sup>手<sup>ハシマ</sup>取<sup>ハシマ</sup>上<sup>ハシマ</sup>、<sup>ハシマ</sup>らふ<sup>ハシマ</sup>じませ<sup>ハシマ</sup>何所<sup>ハシマ</sup>やらから短冊<sup>ハシマ</sup>が船<sup>ハシマ</sup>へ  
 ちり込<sup>ハシマ</sup>まし<sup>ハシマ</sup>たと、渡<sup>ハシマ</sup>せバ深雪<sup>ハシマ</sup>手<sup>ハシマ</sup>よどり上<sup>ハシマ</sup>、諸人<sup>ハシマ</sup>の行<sup>ハシマ</sup>かふ橋<sup>ハシマ</sup>の通路<sup>ハシマ</sup>へばだ

へ涼しき風や吹らん、<sup>ボシヨ</sup>やさしい此つらね、墨つぎといひ手跡といひ誰  
口すさみぞ床しやど見やる陸より阿曾次郎思へず見合す顔と顔互よ  
見どれる目の中よ通ふ心を岩橋の渡してほしき思ひなり、かゝる折から  
川邊傳ひ、浪人めきし二人の醉どれ、何の會釋のあらけなく船へ飛込  
深雪が傍尻引まくり大あぐら、淺香のはつと深雪をかこひどなたかれ  
存ませぬが女計の此船へ何の御用でござり升、何の用とひさりとの  
不粹今橋向ひの料理やで一ぱいきめこみ、橋の上から聞て居れべどふ  
もいへぬ諷ひかたじや酒の間をしてやらふと思ひ思ふて押付客、お娘  
の盃いただかふとすつかりいへば淺香の興覽<sup>きやうらめ</sup>、女計とあなどつての  
狼藉か不肖ながら藝州岸戸の家老秋月弓之助が息女の遊參妨げ志や  
ると爲よならぬぞとおどせばいつかなせくら笑ひ<sup>ハハ</sup>、弓之助でも館  
之助でも乗込だらすめでいいなぬ四の五の云すと娘と酒もありいや

とぬかせば、どいつもこいつも縛り上て念佛講玄やと弱みへ付込傍若無人憎しと宮城阿曾次郎船へ立入詞を和らげ、シレくお若い衆酒機嫌でされ事か此船の拙者が預りの女中ぎやく得忘れぬ他人と酒宴へ致るせよくし餘の船へござれよといへば二人の目をむき出し、女計と幻妻がぬかしたよ、わわれが預りの客とひま、そんな古手なとで行の玄やないぞよ、わるく玄やれるとヨリヤ斯と云様擗む胸づくし逆手ふ取てぐつと捨上ナ云せて置バ様の狼藉手向ひ致さバ酒のかわり、水喰ひぬ内早く歸れど、右と左ともんどり打せ脊骨も折よと刀の胸打りうくはつしと打のめせば、アタマハモ痛入たるおもてなし、最早に免と四つ這は岡へやうく這上り、跡をも見ずして逃歸る、つゞいて追んとゆく袂深雪の押留留、シヤどなたか存ませぬが、危い所をあなたの影、何とお禮をすそふやら、シ淺香ハヤモ此お禮がちよつきりちよつとひやすられませぬ

幸有合お盃、何なく共酒一つといふを押へて、<sup>アヤ</sup>必おかまひ下され  
な拙者も待合す人がござれば、早お暇と立を淺香引といため、女計の此  
船中、又どの様な狼籍者ラウセイザウがこふも知ませぬ、ながふどりやませぬ船頭の  
戻る迄、左様より仰らるしを、おして歸るも必なき業。然らば船頭の歸る  
迄、アヤ居てやらふとおつ志やるわいな、<sup>シテ</sup> 俗察人様ちやつと其お盃を  
といへば深雪の顔打赤め思ふよ任せぬ船の内お慮外ながらお盃をい  
たゞきましたらいか計、お嬉しうとの其跡、岩手の山の岩つじ、あた  
りまペゆき風情なり、<sup>ヨウセイ</sup> 痛入たるは挨拶先刻承れば岸戸家のは家者  
秋月弓之助殿のは息女とや我等宮城阿曾次郎とす者、お馴染ラクジムの爲頂戴  
と、呑でざいたる盃、深雪の嬉しさ押いたゞき云たい事も人目の關心  
んきらしげよ淺香をば見やれば呑込通りもの、<sup>ナ</sup>此船頭衆の遲い事祕  
衆と連立て、そこら見物がてら見て參りませう、阿曾次郎様とやらえば

しの間は頼ります。少し察人様隨分と心残りのない様よ。心一ぱいは馳走を。一はしりと氣を通し皆も引連上り行、阿曾次郎につきほなく、見廻す傍よ我たんざく、ヨリヤ先刻風よ取れし拙者が腰折<sup>スリヤ</sup>此お船へティちつて來たのが縁のはし、お慮もじながら此扇よ何なりとちよつと一筆、ヨリバく結構なお扇子、金地<sup>キンヂ</sup>よ朝顔<sup>チヨウガ</sup>見事、およべぬ我等が拙筆よ書汚すり、ぶ志つけながらと有合硯上代やうの走書墨の色香<sup>イロカ</sup>よ引さるし、心深雪<sup>ハシタガキスル</sup>嬉しげよ押戴<sup>オモテテ</sup>て打詠め<sup>ボシニ</sup>手と云唱歌<sup>シヤクガ</sup>と云、かへゆらし朝顔の歌<sup>チヨウガ</sup>一生放さぬ私が守りと、云つし其身も筆取上用意の短冊<sup>たんざく</sup>取出し、妻を戀歌<sup>シヨウガ</sup>のもし涙草<sup>ダラス</sup>、墨つぎ早く書認<sup>シタ</sup>め、おはもじながらと指出せば、宮城<sup>ミヤコ</sup>も興し手と取上<sup>ム</sup>、戀慕<sup>コヒシタ</sup>ふ心通<sup>ハシカ</sup>す風もがな人目隔<sup>ハタフ</sup>る君があたりへ<sup>ム</sup>、見る影<sup>カゲ</sup>もなき某をアイふと見初しが思ひの種不便<sup>チホノヒン</sup>と思ふて給へれど、がつと寄添抱付直<sup>ム</sup>、障子を玄めからむ、松<sup>マツ</sup>よ這<sup>ム</sup>てふ藤かつらいか成夢<sup>ヨハメ</sup>や

結らん折からいさせき奴鹿内彼方をうろく眼阿曾次郎様  
阿曾次郎様でござりませぬか國元より急に用と呼へる聲又阿曾次  
郎はつと驚き深雪をばなだめすかしてとつかひと船より岸へかけ上  
り汝の留主を預けし鹿内あへたゞしく何事成ぞ本國より火  
急のほ状と渡せば取て封押切讀下して大きみ驚きゴリヤ伯父了庵より  
家督を受繼鑑倉へ下り殿へは諫言致しきれよとの義ハ大恩ある伯父  
者人の頼み聞捨がたしヨリ鹿内其方の先へ立歸り旅宿を片付發足の用  
意せよ急げくくみぢく畏まつたと達者もの宙をどんで引かへす引つ  
りいて阿曾次郎立歸らんとかけ出すをのふ是待てと深ゆきひ船より  
欠上りヨリア曾次郎様云殘した事も有せめて今宵此船と取付歎  
けば尤も去ながら聞るゝ通り火急のほ用最前扇と認し朝顔の唱歌  
を我と思ひ廻りあふ時節を待れよばらべと計袖ふり切行んとするを

猶さうすがり、マテ待てど、とゞむる折しも淺香の船頭引連て川邊傳ひ  
 よ戻り足斯を見るより押隔へだて隔、ゆ深雪様淺からぬあなたのお情、ゆ禮の  
 たらぬのお道理なれど、人の見る前又重ねて、ゆ禮や時節も有ふ、イヤ、阿  
 曾次郎様、主人の名の秋月弓之助、必ず出を待升る、某宅の下川原程  
 遠からぬべ尋ねアさんさらばくと船と陸別れの涙かなしさよ、見返  
 る深雪を無理やりよ、船へ伴ふ其所へヨヤやらぬひと以前の惡者、あらり  
 れ出て阿曾次郎が右と左にむしやぶり付シヤ面倒など振ほどき、直みざ  
 んふと水煙船のもやいをどくくと漕出す船子殊と背の遠ざかるこ  
 そせひもなき

### ○ 真葛が原の段

我戀こひハ松を時雨しへの染かねてと慈鎮じちん和尚おうが言葉の種真葛まごが原の片邊り  
 風爐ふろよ常蓋じやうがさかけ床几茶代一腹ふく一錢せんが店の風雅ふうがの捨所丸山戻り色酒いろざけの

醉をさましよ來る客の中よ目ゑゆんた京羽二重見へ作れど懐の瀧  
茶香いる茶筌鬚逆立花桂庵迎ビより口のよふ廻る判官このみの辨  
慶醫者玄かつべらしく茶碗さし置コレふ由けふり壽貞尼の何處へ趣カ  
れたういふ家様の大坂のふ客で正阿彌へ参られました、風の神でいな  
ふて正阿彌へ付こまれたか、又桂庵様の久しい口合、おまへれ又ど  
こへお出だへ、下拙八百八十軒の病家廻りを仕舞餘りほつとした  
ゆへ井筒で一世界藝子共もりつぶされ、かかるじやないが、醉さまし  
風よ吹れて罷こしたシレともあれ此店へ年の頃三十一色黒でつ  
くりと脊の低いお醫者が下拙を尋ねまいわせなんだか、そんなんお方  
の見へませなんだ。ナモふ来そふなものじやがチ、むがふから来るがそ  
ふじやイナコふよほ、仁と内證の咄しもあれば、そもそもじり暫らく勝手へ、  
ノイ合點でござんす、用が有なら手を叩いて下さんせとお由の勝手へ

入よける宿のあらぬ歩行やうと見やる向ふへ隠の祐仙、それと見るより、前祐仙様先刻より白鷺が火事見るよふ、道ながふして待ているよ去迎前の懸路前不精といふ、祐仙腰打かけ前やつがれも心前せいたれどよんどころなき朋友前出合端前の寮前の書畫前の會それから快々堂で下らぬ薄茶前一服よふく抜前て只今先何前の扱置兼て尊公前頼だ秋月弓之助の娘仲人せふと尊公の請合仕游料前三十兩前相渡すと出せば受取懷中前シバ慥前落手先方前も承知なれど爰前一つの難義前といふり、先方前武家方前へ醫者を聳前よらぬ様子元月心前といふ出家が宮城阿曾次郎といふ男を仲人せふと云入大抵前二親の注文前逢たが下拙前彼秋月前立入するゆへどふぞ阿曾次郎の人品國所を開合してくれとの頼み、尊公の懸前のかなふ前表也、前然る所彼阿曾次郎前色白く厚髪の當世男尊公の物髪此一條前下拙前も色々心を碎き罷前有てや、それ

が何の心を碎く事、娘めへなら、元服げんぱくのふろか坊主ぼうずみ成ても苦しうな  
い、自他とも仲人頼み入る、そんなら祇園邊ぎおんへんの髪結床かみゆびとで懸らみ元服げんぱく、合點  
と祐仙くわせんの戀こいみ上あすり氣きもそそう、床とをさしてぞ走はり行は跡あとみ桂庵けいあん思案しわん顔がほ  
ア三十兩さんじゆうの着服ちやくふく、玄くつたが、もつときやつをすりふらす妙計めうけいが有あるそふな物  
と、もくろむ折たたしも下女しもめお由鍋よなべを片手かたてみ立出だれべ、桂庵けいあん目早くまことに、おまし  
へ其鍋そのなべおれおれも賣うてくれまいかいか、めつそふな、これこれの内の菜鍋さいなべ、玄くつかし直ただ  
打次第うちじで賣うもせふが何なにぼぼかふてじや、は張込はりこで銀ぎん一いつ買くかい、めつそ  
うな、そんなら貳朱にじゆ、まくもそつと買かたたく、そんならてんぼの皮かわ  
一步いく、ま一步いなら負まけても上あ此鍋このなべ買うて何なによさんす、何なによせふとも細さ  
工くり流りゆう仕し上あがをほらふじと、小柄こづかを抜ぬて丸益まるますへ穴あなのあく程鍋炭なべざんこそげ、  
手早く紙かみと押包おしつぶみ是これでよし、シサア一步必ます此この事こと他言ほかごん無用むようマタ外ほか又また頼たのむ子こ  
細さ高たかふの言ことれぬことからくくと耳みみ口く、そんなら其鍋炭そのなべざんをふりかけた

ら惚れたふり、ヨリヤ聲高し、内よ忍んでよい時分、首尾よふいたら又一步。  
 ハテ何よもいふなど兩人が、うなづきあふて内へ入、そり立あたまの鳥毛  
 立延た鼻毛を拔出しの髪よりたらく油汗、いきせき戻る裁の祐仙、桂  
 麗見るよりあふぎ立似合たりくとんと片岡我當生寫奇妙くシタガ  
 少しの難は鼻が獅子舞目が下り目、是ばつかりが玉よ疵よひよつと彼  
 お娘が嫌ひせまいかナットそこらぬからぬ下拙が家傳の惚藥則爰よ  
 所持致すナヨそれが惚藥とな中よ海よ千ねん山よ千ねん三千ねん功を  
 經しいもりの黒焼ばつくと振かけると、小野の小町の様な堅造でも  
 するくべつたり惚るが妙、然し代金ハ拾五兩、お望なら手よ入ませ  
 ふか、お娘のほれるよ違なくば拾五兩が廿兩でも入用く、則是よ十  
 五兩、さらば指上の玄たし物と鍋炭渡し金請取相圖の玄ふき咳ば  
 ちひ、それとおよしが汲で出る目元の鹽茶指出せば、祐仙は是幸惚藥の

試みと振かけられておよしいうつとり、いつの間よいとのごよお  
なりたへつんともふわじやあなたを我當かと思ふて、首筋もとからぞ  
つとして、わたしや懸風引たそふなど、傍へ寄添ひ祐仙が、ふと股ふつつ  
りアタマ  
何とする、何アタマやいな何とするとは下心の悪い目もとな  
ら鼻付ならどつこよ一つ惚氣のある、あた好らしいともたれしアタマ達磨  
人形よのら猫の、志なだれ付し如く也、祐仙アタマの薬の利目と一團アタマ思ふ悦  
び顔アタマ妙藥も有アタマあるもの、終アタマ女アタマかやうな事臍アタマの緒切て覺へぬやつ  
がれ、何アタマやいな人アタマばつかり氣アタマもませ藥アタマの咄アタマし聞たふない、内太  
股アタマがうそついてこたへられぬといだき付、是アタマあんまり利過アタマた桂庵頼  
むと遡廻るをやらじと追て行ふでじり、上げる出しおりよ桂庵アタマも腹アタマをか  
へて、アタマ、「志たひ行」

## ○岡崎のだん

名よしあふ花の都の片邊り聖護院の町はづれ風雅を好み一構主の秋  
 月弓之助元の藝州岸戸の功臣くらき主君を諫かね仕を辭せし浪人の  
 身退たる氣さんじへ作りそだつる朝顔の世話と心を慰めける妻の操  
 ハ一間を立出や我夫早朝より花のお世話喰お氣が盡升ふとお休みと  
 たばこ盆夫思ひの眞實心と奥よく氣が付いたさらば一ぶく仕らふ何  
 と奥身が手作りの朝顔見事でおりないかさればいな今朝といつよ  
 りも花がたんと咲ましたか此朝貌の花と付て氣とかしるは娘の深雪  
 もふ時分のきた者を一人置け病氣のもととふぞよい簪を取て早ふ初  
 孫の顔見よふとは思ひぬかとそこよ如才が有物か元身共の岸戸譜代  
 の家臣なれど當時の主君お蘭のかたといふ側室と迷ひ其弟の蘆柄傳  
 藏といふ四夫を取立て高祿をあたへ剩へお蘭の方のすしめよつて  
 我娘よ傳藏を娶せよとの義系圖正しき娘深雪四夫下郎の成上り者を

智ち又取とねりが胸悪きつわるく。亂邦らんぽうに入いずといふ古語こご又從したがひ任おのを辭退さつたいし浪人うきにん住居すみよも元もといといへば娘むすめが不便びんさ、それゆへあれ是ぜと智ちを聞合きあわせしよ、立入たちいりの醫者じや立花桂庵たてはなけいあん似合あいあの縁談えんだんア來くわりしゆへ得と筋目すじめを聞紀きせば、是ぜも元もとい中國武家ちゅうごくぶけの生れ、名は宮城阿曾次郎みやぎあそじらとやら、人品はじんひんはやま及およす、萬能まんのうよ達たつせしとの義ぎそれゆへ先客分さきやくぶんよ呼迎よむかへる約束やくそく致いたいた今日は吉日よきひゆへ桂庵けいあんが彼かれ阿曾次郎あそじらを同道どうとうする筈はず女共めのわらわよ付掃除そうじ万端ばんぱん云付いふ召めれと語ことる夫おとこの言こと葉は又探みささも心落付こころなげて、目出めだたい事こと、それなればとふからそふといふつ玄くろやらいで、私一人わたくしひとりが物案ものあわせじ女共めのわらわや乳母ちづくめも云付いふて、髪かみのかざり小袖こづくめの色いろ、品問談合ひんもんたんごもせみやならぬない、それが肝心かんじん身みへ圍かこみて薄茶うすぢゃ一ひとぶく、お身みも相伴とも玄くろやれいと、夫婦打連入たたきりスと白齒しらはの娘氣むすめのうみ、こがるゝ人ひとをくよくくと、思ひつけし亂れ髪みだら過すぎにし宇治うじのあだゆめも風ふよ破はれし懸衣こし深雪ふかのゆきの居間ゐまを立て、傍見廻ひきまどし獨言ひとりごと、ボソニ任せぬ浮世うきよ浮世うきよ迎むかたまへ、逢あた

阿曾次郎様心のだけを云隙も情ない。お國の迎ひ周防と計行先の當所立ちねばあさへも、言傳やらん便なく、是程こがるし心根を直み云たてて、<sup>間</sup>泣らせたい。逢れるつて、<sup>ハ</sup>ない事かと、其ましそこよ打ふして、聲も得上す忍び泣、娘心ぞいぢらしき始終うかれふ乳母淺香納戸の口を立てて、<sup>間</sup>や深ゆきさま一昨日宇治より戻つてから、何やら立めくと思ひありげなふ顔持ちいさい時から育た私何の遠慮又及ぶものあかして云て下さりませと眞實見へし言の葉よ、深ゆき涙押かくし、<sup>間</sup>乳母と立た事が何のそなたよ隔心が有ぞいのふありよふい蟹狩よ、ふつと見初た、アイヤふつと風よ當つてから、モ立んきでくならぬわいの、それり風を引立やんしたのであろ立かも戀風といふおもい風を、ヤアそんならそなた知ていやるか、立らいで何と立ませうぞいの、楓ようすく聞いた上おまへの居間み有た扇歌の唱歌の朝顔手跡は宮城阿曾次郎殿、<sup>エトモ</sup>

何と違ひへござんすまいがな其阿曾次郎殿を戀こひてがれそれゆへの物  
案あんじと私わいとふから知て居ますサシか案あんじ遊はばすな前よりふて悦えば  
す事ことが有ありふよ深雪ふかゆきの傍そばより、私わい悦えばす事こととハヘア外ほかでもな  
いけふおまへよ智様ちざやがござる筈はず何なにと嬉しいかへアわしの智ちとハソヤ何なに  
人ひとわしやそんなど聞きたふあい云い出だしてたもんなどねぢ向むかそぶりつく  
トト見てみわけも聞きずそりや何事出入しゆりゆつの醫者いしゃ桂庵殿けいあんの仲人なかひとでく  
る聾れいがねハ宮城阿曾次郎殿みやぎあそじやうと聞きて深雪ふかゆきの二度胸むねり、アく阿曾次郎さん  
がござんすとハ、シリほんのとかいのふくく、何なにのわしが嘘うそ云いませふか  
ふ云いふ内うちも心こころがせくく、それくくそんなら髪かみも結直ゆひきし小袖そでも相談あたんサアく來く  
てたもと手てを引立よこ、悦えび勇いさみ納な戸口どぐちのれんの内うちへぞ入いみける、斯たて其日そのひ  
も畫ひら過すて隙行駒ひまゆきの夫めならで、岡崎おかざきの隠家かくれいえを尋たずねて爰こ來く  
爪つめの立花桂庵たてはなけいあん似にた山智さんちの祐仙ゆせんを爰こじやくくと手招まねけペ、鳥とりや戸明とあけ

ちやぼどりの、米見付たる風情<sup>ふぜい</sup>よて、ぱつぱくと錫炭<sup>きりざな</sup>をまきちらし  
 し出来り<sup>アリ</sup>。深雪殿の、お座敷<sup>おざしき</sup>にもふ爰<sup>あひ</sup>かへ、おりや、恥かしいとはなか  
 ペキ<sup>アリ</sup>。そんな初心な事で、坪<sup>ひら</sup>があかぬ道<sup>みち</sup>も云通り、宮城阿曾次郎を忘<sup>わす</sup>  
 れまいぞと、云付<sup>ひりつけ</sup>置て門の口頼みませうとおとなへば、手禪<sup>たすき</sup>はづさず飛  
 で出ず、納戸の内より下女のりんごふれといふも不性<sup>ふじやう</sup>なり。立花桂庵  
 に見廻<sup>みまわ</sup>、誰<sup>だれ</sup>じやと思ふたら桂<sup>けい</sup>あんさん<sup>びつり</sup>、悔りしたがの、道理<sup>ぢの</sup>く、顔見  
 たら猶<sup>ひづ</sup>悔りせふ、弓之助殿へ下拙<sup>げう</sup>が、宮城阿曾次郎殿を同道致<sup>どうとうしつ</sup>したと  
 傳<sup>つた</sup>へられて下されふと、いふよふりんが心得て、其儘<sup>そのまま</sup>をくへ走行、下女が  
 玄<sup>くわ</sup>らせよ弓之助衣服改<sup>いぬきあらた</sup>め提刀<sup>さげがたす</sup>操作<sup>さばく</sup>ひ一間<sup>いつま</sup>を出、こゝ桂庵老太儀<sup>おじい</sup>くへ宮  
 城氏を同道<sup>どうとう</sup>とや早速<sup>さつそく</sup>、對面<sup>たいめん</sup>玄<sup>くわ</sup>たし、はく是へよ表へ出<sup>あひだ</sup>萩<sup>はぎ</sup>の氏<sup>うじ</sup>、アリ宮城氏、  
 イヤお通<sup>とお</sup>と、玄<sup>くわ</sup>かつべ顔返<sup>かんむ</sup>事を何<sup>なん</sup>と祐仙<sup>ゆうせん</sup>が今更<sup>いまさら</sup>どふか玄<sup>くわ</sup>き高く、うちく  
 もぢく入<sup>いり</sup>兼<sup>あわ</sup>るを無理<sup>むり</sup>と引張<sup>ひきぢり</sup>連<sup>つづ</sup>て入<sup>いり</sup>、顔を見るより操<sup>さばく</sup>のあきれて不審<sup>ふしん</sup>

顔様子あらんと弓之助、桂庵考、宮城氏いひづれみどさるな、則お目  
通りえひかへ居られます、其仁が宮城阿曾次郎殿とや、イカ正取取と  
ぬくくの阿曾次郎殿、シ宮城氏は挨拶と、いへば祐仙扇をばちくい  
かよもやつがれが萩野、シヤ、宮城阿曾次郎此度ハ不思議のほ縁では息  
女の聟みなし下されふとの事聞と其儘病家も打捨、シヤ、聟舅始めての  
對面、餘り詞が多過るハ桂庵苦しうない、シヤ宮城氏み娘深雪を知て  
居召るか、イナ、知た段玄やござらぬ、シヤ、いつぞや當所清水寺地主權現の  
花盛り病家がなさみ見よ行しが薄雪、まがひのぼつとり者花の帽子、  
花の櫛花の姿の、花やかさ首筋元からぞつとして見とれる内、早下向  
下向せふとてお姿を目よながめられせぬ物を残り多さみ見へ隠れ、此  
岡崎迄付て来て、親の苗字お娘の名迄聞合す程の心底男、聟入したら  
朝寐せず、水も汲だり飯も焚、あんまけんべき針のりやうじ料物入ず

仕らふと玄やべる度々桂庵の消も入べき矣ゆつなばよ冷汗流す計也  
 操り小腹立ながらなぶつて見んと打ほしゑみ、レバふつゝかな娘を、そ  
 れ程迄みに執心ならばいかよも縁組致そふが此方の諸藝師範の家柄調  
 詩歌俳諧香茶の湯其お心がけがござりますか、有共く歌うたハ彼九かの病  
 五七あめの雨あめ四つ日照六つ八つ騒ぎいつも大風ひヤナリや地震の歌うた  
 やござりませぬかいかよもく自身の作四か五かれ存せぬが灰買はいかい  
 りハ糠買ぬかかいがはるか増つてはけ口まきぐちがよふ刲茶さくぢゃス於てお、薄茶綠茶栗皮茶ちやくろくぢゃり  
 利休茶りきゅうぢゃ茶藍あらび見る茶ぢゃらが當世十人向むか香こうス於てお、線香抹香せんこうまくこう沈香じんこう  
 五種香ごしゅこう、望次第藥種わうじだいやくしゅやみて隨分利口りこうス買廻かいし手の物也ものとぞ玄やべ  
 りけるハだまれまいす者めヨリ、ハナラ武士ぶしを嘲弄ちろうスうせたかと刀追おと  
 取きめ付れば祐仙桂庵ゆうせんけいあん恵めはいもふハめつそふなく全左様な者な  
 らず、まがひなしの阿曾次郎あそじらナシカスなうつけものと見て取た様子

有んどうかよふそれがし。アリ關助こやつまみ出せよと呼ひる聲み  
はつと答へ走り出たる奴關助、アリさまの馬鹿者めらきりく立  
て失ふらえ長居ひろがばぶち放すと刀の柄み手をかくればさうたまら  
ぬと祐仙桂庵命からト遡歸る弓之助ひよが笑ひ、ハ拵シ世よりう  
つけたやつも有バ有物たわいなしめよからつてほつと退屈、關助休み  
やれ、ヒ一休みと立上れば操も共またばて盃提て一間へ關助も勝手へ  
こそ入よけり寐ぐたれのつとのふくれいときながらもつるゝ思ひ  
くしきと深雪がむねの亂れ髪、たれよ云べき方もなく涙よ袖もぬれ  
様の朝顔の花打詠めどふした事の名よしやらふつと見初た阿曾次郎  
さまは國元から急用との使ひ戀の障りの雲晴間の星のたまくもけ  
ふ逢るゝと思ひの外待こがれたる甲斐もなく、あられもないおらぬ人、  
ほんみ思へばあじきない暫し別れのかたみよと書てもらふた朝顔の、

歌の唱歌も我袖も、涙の露のひぬ間なき歎きせよとの歌占か、宇治の螢となりるならば、あくがれ出て夫の傍、飛て行たい顔見たいと、かたみの扇身も添て抱えめく忍び泣日影待間の朝顔の雨も、ゑほるゝ風情也。うしろも立聞めのど淺香、それぞと察し立寄て、コレア深雪様桂庵殿の鹿忽ゆへあはうらしい今の時宜、ゑんきなハ道理く、シタガお氣遣ひ遊ばすな。此淺香が奥様へお嘔しき、阿曾次郎殿をきつとおまへよお添します、くよく思ふて病氣やなど出たら、親様へ大きなふかう氣をゑやんと取直して縁と月日と待が肝心、アく奥へと諫められ、少しひ心晴かけし袖の時雨のふやみして夕日てり添、薦紅葉、顔あからめて入みけり、折から表へあひたゞしく、せきよせいてかけ来る武士、音のふ間もなくすつと入弓之助殿く、弓之助殿に在宿かと呼ひつて、尻居よどふと倒るゝ息切、何事やらんと弓之助追取刀よ走り出、見れば覺への古朋輩ぬる

み汲どり用意の氣付口よ含ませ氣轉の活ト計よ氣の付若者弓之助  
殿、瓜生主水が舍弟勇藏、あひたゞしき体心得す子細へいかよ様子へ  
何とばつと勇藏氣を取直し、さればい國元よりお蘭の方の威光をかり  
成上りの蘆柄傳藏に前よきまゝ下ゝへ過役をかけ金銀を貪りしより  
事起りに領内の民百姓一揆を起し我一と袖が浦の城廓へ押寄くく追  
取卷無二無三よ貴立る去よつては家の騒動大方ならず早大亂よ及  
ばん氣色此騒動を乞づめん者弓之助より外よなし主君の後悔頼みの  
は狀片時もはやく歸國有て賢慮を廻らしお鎮めあれ我れ此儘國元へ  
心もせけべと云捨て元來し道へ引かへす弓之助の大いよ驚き狀押開  
き讀下し誠よ殿に自筆先非を悔みしは頼の文体、ハア勿躊なしく主  
家の大亂見捨ん様なし。ヤア女房娘も歸國の用意關助參れの詞の下は  
つと答へて欠出る奴、ふ且那何の用でござります、火急よ國元より

は召のゆ狀到來せり今日中又家内を片付、今夜直様伏見迄發足せん。心得たるかと云渡し奥をさしてぞかけ入たり俄の歸國又周章混雜氣もいらぐと關助が何からせんと心のもんちやく斯共玄らず阿曾次郎歸國の暇餘所ながら深雪又一目合の戸を、それ共さすが明かねしが思ひ切てそつと入頼みませふと音なへべ、此せひしいよ何者じや、宮城阿曾次郎とア者と、半分聞すヤ又うせたか大馬鹿者トコロと夕暮時、顔トコロへ見ずよ突出し、戸を立切し人違へ様子玄らねば阿曾次郎、いふかしながら詮方なく跡の歎きの種トコロぞとの玄らず知れず別れ行

### ○明石船別れの段

和田海の浪の面てる月影も、明石の浦の泊り船風待種のつれぐを慰め兼て阿曾次郎、艦先又立出月かけよ四方を見はらす氣晴しの、田葉紛の煙り吹なびく船路の旅ぞ物淋トコロし、そばよからりし大船トコロ、秋月弓之助

が歸國の乗船乗人も水主も船草臥前後も志らぬ高麗娘深雪ハ只一人  
目さへも合ぬ戀人を思ひこがれてうつゝと懲る心を筑紫琴せめて  
慰むよすがもと、かきならしたる糸しらべ、露のひぬ間の朝顔よ、照す日  
かけのつれなきよ、<sup>同</sup>合點の行ぬう諷へ過つる宇治の蟹狩よ、秋月の娘  
深雪が扇よ某が書てあたへし朝顔の唱歌、聲さへ深雪よ生寫、しういふ  
かしさよと見上られ、あなたも見下すかき立の、顔ハまさしく、深雪殿で  
はないか、<sup>ナ</sup>阿曾次郎様、逢たかつたと我を忘れて乘うつるを抱きとり  
て口よ手を當て、聲が高い深雪殿、思ひもよらぬ今、の對面何故よ此所よ、  
さればいな、宇治でお別れすてより、片時忘ず泣暮す内、國元よ騒動起り、  
父母共よ俄の旅立所詮逢ふ事叶ひぬかと、何ぼふかなしふ思ふたよ、爰  
で逢たひ盡せぬ縁、どふぞ此身を何國へも連て退て給ひれど、ひとつたり  
抱き、月の夜の影も隔ぬ比翼鳥放れがたなき風情也、阿曾次郎も心を察

し、嬉しいそなたの志忘れぬかぬ去ながら、そをたを今連退てい、某  
 が武士道立ず殊々此度伯父の頼みみて、遁ぬ主用猶もつて、女を同道し  
 がたき入譯有縁ならば添時節も有ふ斯して居て人の咎め、ナチやつ  
 と元の船へ乗てたも、そりや聞へませぬ阿曾次郎様、添れる時節も有  
 ふとい當座遁れの捨詞お氣入すに打明てつしますそれといふてた  
 べ、もしもおまへよ添事のならぬ時より淵川へ此身をなげ死まするふ  
 たしひ外の夫迎へせぬを誓し身のけつぱくさらばと計水底へ既に飛  
 んと立上るをあひて驚き抱きとめ、コレ待た早まるまい、よく放して殺し  
 て下さんせ、せひもなし、夫程迄思ひ詰た娘心見殺しよ、とふせられふ  
 不義徒と世の人口、そしらばそれ連て退、コレ盡未來迄女房ぞや、嬉し  
 うござんす添い、そんなら願ひを叶へて下さんすか、武士の詞よ二言  
 わない去ながら此儘よ連て退バ親達のもしや海川へも身を投たかぞ、

お歎きあらんハ定の物委しい様子をつい一筆、よふいふて下さんし  
た私もそふ思ふて居ます、かどふぞ料紙りょうしきをかして下さんせ、心得しと。  
懷紙腰ふところがみこしをさぐつて南無三寶阿彌陀佛そなたを抱留る拍子海へ何やら落せし水  
音旅矢立たびや立ちをはめてのけた、どふぞたらよからふぞ、それなら待て下  
さんせ、二親始付はじふ迄旅草臥たびくたばの寐入ばな、そつと元船へいんで一筆書置  
してきませう、それよかるふ必ず物音させて、親達の目が覺ぬよふ、心  
得ましたと立上れバ、阿曾次郎あそじろうの肩車かたぐるまあなたの船へ乗移す、音又目覺す  
船頭兵ボウ、地嵐ちあらしが吹出した碇いかりを上よ、帆ほを巻まきと騒さわぎ出せば、なふ悲かな  
あせる内、船ふねハ次第とほ又遠ざかる、ヨリ河かとせんかとせんと、あせるはづみ  
阿曾次郎あそじろうが、船ふねへ投なげ込む扇おうぎの別れ、跡白浪しらなみを隔へだての船、つながぬ縁えんぞ是非も  
なき

## ○弓之助家鋪の段

爰々藝州岸戸の家臣、秋月弓之助が一擣性得風流文武又秀人又勝れし  
 武士の都又蟄居しありけるが國の亂れ又召歸され殿の仰おほせを承り、事治  
 りし其後へ昔又勝る歸り唉、いと美うつくしき數も榮さかへけり、家の接木つぎきの一人娘  
 深雪みゆきの思ふ其人又たまく逢し其甲斐かひも浪の明石あかしの別れより、國へか  
 へりし其日より只ふらくと物思ひ、こしもとはした召連て、一間の内  
 より立出れべ、中又早枝が志や志やり出あつて、又深雪様此節このじやくの志めぐと、物  
 思ひしいお顔持おほそ、外でも見てお氣をおはら晴はるしなされませ、よふいふて  
 たもつた去ながら私が心の志んきおもき、月雪花つきゆきはなのながめよも、勝るいく  
 せの物思ひ過し明石あかしの浦浪うらなみのうらめしい追風おいのかけ嶋しまかくれ行戀人ゆきこひと  
 の船おしづ思ふ思ひをペ誰なれといひふぞ語かたふぞよくく結むすぶの神かみにさ  
 へ見放されたる憂身うみかど、心の内又口說泣おき、女心めのこころぞいぢらしきおぢらしき、何をく  
 よく思召おほしらす親旦那様のお歸り又間も有まい、是から奥はるの離れ座敷ざしきで楓かしで

を相手より琴の組でも遊ばしたらお氣慰みも成ませふ。さくお出遊ばし  
ませど、姫共よ誘なれ心浮ねどしほくと是非も投首立て行かしる  
折から玄關先蘆柄傳藏様入と呼へる程も荒々しく疊々わりも無骨  
の蘆柄肩で風切勿躰顔横平らしく打通る斯と聞てや主の妻探へ出迎  
ひ會釋して、傳藏様よふこそく先とあれへよ上座に付、おさめた  
顔と操作の手をつき夫弓之助殿の召すて登城の留主それ故お出  
迎ひもやませぬシテ只今何の役用と尋ね、傳藏扇をならし、只今參  
る事別義でござらぬ當家の息女深雪殿いまだ定る聲がねもなきよし  
幸拙者も無妻なれべ殿へ内と縁談の義を願ひし所似合しき義と有て、  
お蘭の方を以て弓之助殿へ其趣や渡されしよ有無の返答みも及ず病  
氣と云立候暇を願ひ國を立退れしゆへ縁談の義ハ其儘よ相成しが此  
度歸參召れしゆへ度と仲人をもつて縁邊の事をや入れども醉のこん

よやくのと塙の明ぬ返答それゆへ今日の直<sup>じき</sup>に推參致たは前迄願ひし  
 緑談意變<sup>えん</sup>有ては此傳藏が武士が相立テサヌ否や應の一口商ひ只今返  
 答承らふと權威を鼻<sup>はな</sup>みてつべい押小面憎<sup>おも</sup>さも女氣<sup>めうき</sup>よ、がつとこたへて  
本問  
 見る影<sup>かげ</sup>もない娘をほ所望<sup>しよ</sup>み預る<sup>よ</sup>、何ぼふかほ嬉<sup>うれ</sup>しう存じます  
 れど綠の事ハ親我意<sup>がる</sup>み成ませぬ、殊<sup>こと</sup>ニ夫も留主<sup>るす</sup>なれば只今とヤてハ  
 弓之助殿<sup>とうね</sup>ハ留主<sup>るす</sup>みもせよ、女の子ハ母次第其元<sup>は</sup>さへ得心有ては息女  
 へおすしめあらパ、<sup>ツイ</sup>塙の明事當時<sup>どう</sup>殿のほ氣<sup>き</sup>入のふ蘭<sup>らん</sup>の方ハ拙者<sup>わざしゃ</sup>が  
 姉<sup>あね</sup>其弟たる身共<sup>みきょう</sup>を聟<sup>き</sup>みとられなば弓之助殿の肩身<sup>かたみ</sup>もいかるとヤ物<sup>もの</sup>と、  
 半分聞<sup>はんぶん</sup>す、<sup>ヤ</sup>ナ傳藏様<sup>とうざうさま</sup>、身不肖<sup>しやう</sup>よりござり升れど娘の縁<sup>えん</sup>み連<sup>つれ</sup>て出世<sup>のぞ</sup>を望<sup>む</sup>  
 むよふな弓之助ではござりませぬ其一言を弓之助承らば、たゞへ娘が  
 得心致しても此縁組<sup>えんぐみ</sup>の<sup>ことわり</sup>お斷<sup>じやう</sup>とす<sup>じやう</sup>定<sup>じやう</sup>マそれほどもあれ此頃娘の病氣  
 ユ取合<sup>とりあはせ</sup>ますれば、本腹<sup>ほんばく</sup>の上それとも談合<sup>だんが</sup>いたし否<sup>ひ</sup>やのほ返事<sup>へんじ</sup>致しまし

よ、ヤアぬけくと其手のくわぬ、誠病氣か病氣でないか、此上の身が直と  
又改んと、すんと立バ操もせき立調舌長な少傳藏殿間狹なれども此屋  
鋪しゆハ弓之助が城廓じやうくわくならば手柄てがら又踏込よんぞんでお改られ女ながらも武士の妻  
お相手又成ませふと云つゝ長押又掛たる長刀追取て鞘振はづし、小脇  
よかい込身がまへ構がまへ、さしもの蘆柄あしらひし仰天あがむてんし、又短氣千万改めて悪くばそ  
ふ云て濟事すむ達たつてとやでもござらぬわけ、誠息女そよじよが病氣ならば、隨分だいぶんお氣  
を付召つけめしれ、縁邊えんべんの義ぎ又追つてと始はじめの義勢引ひきかへて挨拶あいさつさへもうくろ  
くよ、先さきがけられし目なし碁ごの片手かたて打うちれし如くみてすゞく、として立  
歸かへる斯かて時刻も押移おしうつり常つね又かれつていそくと、立かへる秋月弓之助  
それと操つかハ手をつかへ、只今お下りかいつゝないお隙ひまどりに前の  
首尾しゆびいいかゝでござり升のぼと尋ねよ機嫌きげんの打うちよつこり調悦えび召めしれお上  
の首尾しゆびの極上ごくじょう、此度國元の一揆一きを相鎮あいしつめし事、殿どの一玄波いんぱに賞美しょうび有

て先地の上又二百石の上加増、イヤモ殊の外の上機嫌にて、悦びの盃迄下された然るゝ大内家の家臣、駒澤次郎左衛門といふ武士、使者又來つて共々相伴、盃の取やりの内つくゞ見る又人品骨柄天晴の若者、志かも文武兩度の達人なれば殿も甚しう賞美有て汝が娘の聾又致せよとの意、かの駒澤も承知の体ゆへ、諸士の手前面目是又過すに前又於て堅の盃迄取かわしやた、娘又は過分の智おとも安堵しめされど、いふと操りソシナラ殿様のお仲人で、サ大名のお仲人みて聾をとる娘の大仕合せ者、聾の顔を見おつたら、嘸悦びおろふと父の悦び母親の娘の心はかり兼案じる胸もそれぞと明ていわれぬ此場の思ひ、ナ我夫、殿様のお仲人とハナガラ娘又も得と云聞した上で、云約束へなさらいであんまりさつきやくでござりませぬか、イヤ某も其氣のつかぬでなけれども此前の仰といひ日本一の上聾拳を以て大地を打はづす共娘の氣又

入へ定の者安堵して娘よ云聞せ召れ、レく餘り悦ばしよ思ひず酒を  
過し餘程めいていドレ暫時一休みと刀を提て機嫌顔居間をさしてぞ「入  
みけり跡え操れ兎やかくと娘の心はかり兼千の思案え暮告る柱時  
計の音さへも胸えどきつく物案じ差うつむいて居たりしが煙管相手  
の獨言今夫の詞でに、上御意えかしつた縁組娘思ひの我夫が見  
極めての云約束鹿相の有ふ様へなけれど只案じるゝ娘の事、いつぞや  
宇治の蟹狩え見初た人宮城阿曾次郎殿と、妙共が噂立花桂庵の仲人  
で、連て來たの賣主者どふぞ元の阿曾次郎殿の行衛を尋ね娘え添して  
やりたいと思へども肝心の所を知ず、どふかかうかと思ふ矢先さしか  
しつた縁結び一旦夫が後前みて、お受ゆた上から今更どふも變がへ  
ならず此上の娘よ譯を云聞せ得心さすが上分別、そふじやくと打う  
なづき娘よと呼聲えアと返事の乞ながらも晴ぬ思ひよくよくと打

玄ほれたる娘の深雪奥より立出傍より母様何の役用どうかとへば、  
 はしりよつこり（ア）けふの髪のかざりもけふとうよふできました思ひ  
 なしか氣合もよさそふでア嬉しいシタガ娘や今呼だり外の事でもない背  
 たけ延（のび）たそなたいつく迄も一人置（ひ）病氣（びやうき）のもとひ、それゆへそなた  
 よい聲（こゑ）を呼迎（よびおがへ）る分別（ぶんべつ）と半分（はんぶん）聞（き）す、アわたしうかへテ（ア）のふ（エ）くわわた  
 しやまと様子有て殿（とのひめ）持事（じごと）いいやでござんす、そふいやる（ア）宮城阿曾  
 次郎殿（ア）心庭（しんてい）が立ぬと思やるか（ア）サかふいへば、惄（ひづく）り玄（アキ）やらふがいつぞ  
 や宇治の蟹（カニ）狩（ハンタリ）、宮城阿曾次郎殿と云約束（やくそく）を玄やつた疇（ラウカ）、必共（コトシキタ）うす  
 くと聞及ベど云出す（ア）けふがはじめ、どふぞ其阿曾次郎殿（ア）添（アシテ）した  
 いと（ア）思へども、肝心（カんじん）の國所（くにところ）にしれず何所（ア）をせふこよ尋人（ソウジン）よふもなし、  
 然るよけふ弓之助殿（アキラカミヤス）登城（ドウジウ）の折から大内家より使（シヤ）使者騎澤治郎左衛門  
 といふ人器量骨柄（カイヨウコハ）揃（アゲル）ひし天暗（アツナカ）の武士と殿様（アシカニヤマサ）殊の外に賞美あり秋

月弓之助が娘と見合し、跡目相續させよとの決意。夫もよい聾と氣に入  
は受けて聾舅の盃迄取かへして歸られ娘とくと云聞し得心させよ  
との殿様のお仲人と云娘思ひの爺の氣と叶ふた聾がね様子といふ  
れ此事玄やわいのふと、そんなら殿様のお仲人で、うはつと計りよ心の  
とふわく何と返事を詮方を涙さし、む計り也。顔を玄らねば案じや  
るも無理ならぬと、聾ゑらみの夫何のそなたの氣といらぬよふな聾を  
とられふ殊々お上の注意のかしつた晴の縁組今更變がへのならぬ聾  
殿よふ得心してお受やしや、ア、ア、あいとばかりでひすまぬわいのふ、最  
前も意地悪の蘆柄傳藏が来て是非聾とならふとの押付業、おどしを見  
せて歸したが、お蘭の方へ云込で、又どのよふな難題を云かけふもしれ  
ぬ、邪魔の入ぬ内縁組の取極が肝心淺香共談合して今宵中又返事しや  
可愛いそなたと何の悪い事すしめふぞ、只何事も親よまかして、早ふ

返事を待て居るぞや、其間は我夫と祝言の相談せふと詞を盡し母親  
 の奥の一間へ入よけり、跡見送つて娘氣み、こらへくし溜涙わつと計  
 りよ泣たさも母よおらせじ聞せじと袖かみおめて忍び音み、絶入計り  
 黙きしがよふく、よ顔を上、聞へませぬ母様、常のよおめしよ貞女  
 兩夫よまみへすとの歎へを守れどおつしやつた其お詞べよ引かへて、  
 阿曾次郎さんと私がわけ知て居ながら二人の夫、もてよどへどうよく  
 なぞふした縁かおらね共思ひ初た阿曾次郎様、思ひきろふと思ふほど  
 いやます思ひ身の因果、生てなま中うき事を見んよりいつそ身を投て、  
 死で未來で添が樂しみ勿体ない父上母様、先立不孝へゆるしてたゞ、  
 又二つよハ乳母淺香、此年月の養育の恩もおくれず死るのも浮世の義  
 理とあきらめて堪忍してたもれやといふもあやなき袖の雨泣と硯取  
 出してあかぬ別をする墨も涙よ薄き親と子が歎きの種をまき紙よ書

置鹿の命毛もやがて切行はかなよ筆の歩みもふるひれてばかどり  
兼るみのあや涙ながらよ書といめ封じる隙も跡先に心奥より聲高く  
寮人様深雪様と尋る乳母の淺香の聲見咎られじとあさし置庭へお  
りしも夕暮の無常を告る鐘の數六つ四つ五つとふ鳥かわいくの聲  
うち身よしみ渡る秋の風ふるふ膝ぶしみゑめて心も足も飛石傳ひ、  
裏道さし足落て行斯とも志らず乳人淺香手燭たづさへ立出て深雪様  
く深雪様いづくと云つゝ見廻す料紙のそべ落たるみを取上で、  
何心なく見て惄り深雪様の書置奥様や旦那様と呼ひる聲よ弓之助、  
操も俱みかけ出れひ淺香ひろげしみさし出しシナ深雪様が身を投  
ると此書置と半分聞ずやく書置とい氣遣ひなど云つゝ操ひふみお  
つとり何よみづから事宮城阿曾次郎殿と云かわしりへば一度の夫  
のむかへりて貞女の道立がたく不孝ながら淵川へ身を投りと

讀間もせき立弓之助南無三寶志なしたり志かしかよひき女の足遠く  
へよも落延じ關助へどこゑふる、早くくよかけ来る奴。お旦那何の役  
用でござり升りやく娘深雪が身を投んとて忍び出しそ若黨下部又手分  
して跡を追かけ取留よ、ヨリヤ大變、かふいふ内も氣遣ひな朋輩共へに淺  
香どの云付召れ、下郎へ直よと尻引からげせきよ關助かけり行、俄の騒  
動泣ふも泣れず、うつむく操乳母淺香弓之助も氣にてんどう、こしもと  
はした若どう仲間呼たてく家内中上を下へとかへしける

### ○大磯揚やのだん

すけんぞめきでむく鳥が、むれつゝ來つゝき格子先叩く水鶴の口なめ  
鳥かみ、ちつともさへづるまいとのはる霞讀ふ聲よ浮立てたそや行燈  
の影光る、懸と情の中の町分て榮る松葉やの、座敷の絹でふき磨き目を  
驚す計なり、此家の亭主仁左衛門替引上はしり出、しゃくいそがしやく

女子共のみまだ粧版みじまつ玄くろまりぬかいく、べんくと塙くずの明ぬけふひ助大盡だいせん  
のほ趣向しゅかうで廊中こうちゆうの色達いろだちを懲揚せいようみして大踊おほなぞりとのほ注文ちゅうもん女共花めぐらも生  
直さし爐ろの炭すみもついでだけ、ヨリヤくやり手共料理場りょうりばの持こへるるるといかと問  
へる男共藝者衆めんぐわうしゃしゆせきよいけよ皆みなゑいかくくく、玄くろんど人ひとをつかふのも  
大抵おほの事ことでないないと、たくしおけたる八百萬髮やをよろづかみの鬢かみさへ、うなづく計天あた  
窓振立まどふりたて玄くろやべりける、岩代多喜太奥いわしろだきだおより立出だして亭主ていしゆ踊おどりの持こへる諸事しよじ万端ばんたん  
手つかつかひひよいか大おほかた殿だいのお成せいよ間まも有あまい、藝者げいしゃ太鼓たいこを大門口だいもんぐ迄まで  
迎むかひひよりやれやれ、そこよ如才ちよさいいござりませぬむとふふよほ迎むかひひよ遣おと  
ひひしました頓とんててお出でござりませふべ、私わの勝手かつてへ參おさかり、着きの指圖さずが  
て置おきませふべ、肩かたから爪つめの長廊ながろう下か、すべりちらして走はり行は引ひ違ちがへるて赤星あかほし  
運八うんぱ、いかついかつがましく入い來らりく、岩代氏いわしろ、万事まことに苦勞くらうも存しりますま、運八うんぱ  
殿だい、今日きのうの役目わくめは苦勞くらうくく、放逐ほうぢく之助のしやくまだ參さんられませぬまかかくく大

門口の茶やで、彼傾城瀬川といちやくちやく餘り塙が明ませぬから、身共へ先へ参りました、それこそ究竟ト其元又ア談する子細あれど爰の端近万里の奥みて左様くと打點首奥の一間へ入よけり、誰も知まい二人が中へ筆と硯が知ばかり、數多の藝妓又圍まれて大内之助義興の色と酒と又亂れ足千鳥が崎の屋舗より、けふも廓の色通ひ現たりひもなり振も夫と多喜太へ立てて、コレ志たり我君明暮ア掛物の繪の如く引付てござりながら大門口のお契りへ、餘りは念が入過ましたと、いふよ義興よつこと笑ひ、不粹などいふなく、それの格別聞ペ國元から來た新參の田舎者、身よ目見へを願ふ由兼ての趣向の通り踊最も呼出し場うてをさすが一興、用意がよくば踊を始めいく、畏り奉る玄かし一家中の内より、抽でし来る程の駒澤もしに諫言ア時へ、又しても諫めくと此仙境へ通ひ初ての釋迦如來が五百羅漢連て来て

異見しても毛もない事く所を諫る臨機應變、くどいく命のかけ  
がへが二三十あらば知ぬ事、慮外ナサバ、ヨリヤ五郎正宗、天晴大丈夫其お  
心を見る上へ太夫どの始め拙者め迄安堵仕りました、ヨリヤ岩代行燈よ  
り燭臺をくいつと點させ、踊を始め駒澤めを呼出せ、ハア委細承知奉る、シ  
女子共早く踊を始めさせい家來衆へ駒澤を呼出し召れといふよ心得  
花車中居酒宴の設けどりト、又既よ踊を始めける、面白の四季の詠  
や、春の上野の花盛り雲みかげらふ兩國の涼の花火星下り、秋へ賑ふほ  
殿山、山王堤又降積る、雪の景色も面白や、音頭を囃子三味太鼓、手振揃へ  
の花がさやかさす姿の花紅葉、お召よ依て阿曾次郎、今へ駒澤次郎左衛  
門と名も改る曠小袖、おめず憶せず入來れペ、兼て差圖を受たる踊子、右  
よ左りとさしゆるを寄すさいらすよけ通す、夫と尻目又岩代多喜太、駒  
澤殿に前成ぞ扣へさつしやへ、はつと飛玄さり故實を正し平伏す、大

内之助のもつれ舌駒澤了庵が跡目治郎左衛門とのお手前な、<sup>じた</sup>意の  
 如く駒澤治郎左衛門め初てに機嫌麗しきに尊顔を拜し奉り大慶至極  
 と存じ奉り升と相述る、<sup>あいのよ</sup>顔を上い、<sup>網</sup>田舎者よりよい男じや、<sup>わい</sup>儕此度  
 参りし、予が遊興を諫言の爲か、<sup>うきやう</sup>全く以て然らば又何の爲、<sup>ハ</sup>恐れな  
 がらや上奉る此度伯父了庵病氣付拙者より家名を譲り跡目のお願ひ  
 後室様のゆ免の蒙りながら未殿様へ目見へ仕らねば家老中へ願ひ  
 を上是迄推參仕つてムリ升、<sup>てだ</sup>駒澤殿、鼠取猫爪隠すと、<sup>ことほ</sup>詞を餌よ殿へ  
 取入、古手な術の諺言やそふといふ下心で御座有ふがや、<sup>まわ</sup>迷惑成<sup>ゆき</sup>疑  
 ひ、拙者め片田舎より生涯の本望と、お呵りも顧ず此仕合岩代殿何卒よき  
 よび取なし偏よ頼奉る、<sup>ヤ</sup>面白い見事身がお傍よ相詰<sup>ア</sup>酒のお

間をするにや迄イモ不調法ながらと案アシタス又相違の受答工合違ひよ岩代イハタケにて、詞なかりけり大内之助ヒロシマツ機嫌キゲン顔マスク、ういやつアレ治郎左衛門盃ヒラタケくれふアハ皆アレ聞アシタスやんしたか、又諫言カツガムとやらでこゝいめ見るのかと思アシタスふたよチモ粹クレなふ方衣紋付なら物ホノモノごしならどこやらのふ方ホノモノとの雪シロと墨アシタスわしがお酌シメせふかいなアレ逢坂アフサカさんのまんがちなあなたがお酌シメハ此蝶山アヒタザン最早ヨリヤ慳氣ヨルキか取置アシタスてつげアレ、アレ駒澤コマツカさんとやら、一つ呑アシタス玄アシタスやんせいなアハ然アハらば頂戴アシタス仕アシタスると猶豫アシタスもなく大盃アシタスたんぶと受アシタスてすつとほしテ中アシタス結構成アシタス酒アシタスシテ此盃アシタスいいかアシタス仕アシタスり升アシタス、ア見事アシタスじや押アシタスよアシタスハ有難き仕合アシタスと、又引受アシタスて呑アシタス波アシタスす酒量アシタス、大内之助ヒロシマツも興アシタス又入アシタス扱氣味アシタスのよアシタスいやつ馴染アシタスの爲アシタス其盃アシタスを多喜太アシタスへさせ、畏アシタスり奉アシタスる然アシタスバ失禮アシタスながら岩代氏アシタスめつそふなアハ身共アシタス朝夕殿アシタス付添榮耀アシタス榮花アシタスの酒アシタスひたし餓鬼アシタスの水アシタス見た様アシタス此大盃アシタス中アシタスいけぬアハ、アレ岩代様殿アシタスさんの差圖駒澤様アシタスのさ

し忘やんした盃呑忘やんせねば比興で呑んせふ、そふで呑んす サアく  
 太夫主の云んす通り比興云すとおまへも一つ呑忘やんせと、無理よつ  
 がれて顔忘かれ、ミ、胴欲な者共とつぶやきながら一口二口うぐく中ゝむ  
 いきより呑れぬりい、ハ、口よ似令ぬよいいやつ、オ駒澤岩代が呑かね  
 をる何ぞ肴を忘て取せバ、意でいござり升れど、前での餘り恐れば  
 苦しうない、サアく所望忘やく、ア然に免と立上り扇を忘やんと身の  
 携へテモ扱もわざりよハ、踊子が見たいか踊子が見たくバ北嵯峨へござ  
 れの北嵯峨の踊り對の帽子を忘やんと着て、踊るふりが面白い吉野初  
 瀬の花よりも、紅葉よりも戀しき人の見たい物よ、所よお参りやつてと  
 ハ下向召れど、かをゑちやかおふて参ら忘よハ、ミ、尾籠の段（まづら）眞平は免  
 下さり升ふ、ミ、中ゝ出かすくナシト太夫よい酒の相手が出来たでいない  
 が、此上の奥座敷であつぱりと呑直そふ駒澤も跡からこいといふも忘

どうも立給ふ岩代の佛頂づら、武藝の外の心がけぬ身共、以後の舞で  
も稽古して太鼓持の仲間入を致そふと、何がなあたるよくて、い口瀬川  
へそれと目配せよ、新造禿の義興公、手引袖引奥の間へ、打連て、こそ入よ  
けり、照もせず、曇も果ぬ、春の夜の月よ、榮ある庭櫻そよ吹風よ誘げるし、  
花の吹雪を打興し詠め入たる駒澤が、目元ちらつく醉心、こなたも同じ  
酒機嫌所体崩して傍よ寄、申駒澤様助様の無理哉いで、お前も定めし  
醉玄やんしたで有ふな、ア醉覺しよ一ふくと、烟管みちよつと吸付烟草  
是も勤の愛相かや、添い當時全盛の君様がお志の此煙草、イヤモろくぎやう  
ユも勝つた賜取あへず賞斷致すと、押戴べ、人を術ながらした云様  
兼てお前の此里へ忍びく、又通の玄やんして多くの女郎衆み詩文の  
指南助様へ、沙汰なし、私も拙い文章の添削受しこなさんが、初めてけ  
ふのお目見へ玄らぬ、顔かしていれど、日頃短氣な子殿様、ひよつと荒氣

ハ出まいかと心の内で幾瀬の案じされども物駒たお前ゆへ、洒ぶりやら舞の手でそれりくきつひお氣入よふ是からひいつ辺もお傍放れすお顔見せて下さんせへ、ヨシハくに深切添い、ヤモ萬事不骨の田舎者お引廻しを頼み入ガそれ格別、ヤ何瀬川殿、そもそもじハ眞實殿様を大切思ふ氣か、若又外より根引せふと有バ其方へ行心か、所存の程が聞たいと様子有げな詞とい思へどわざとそらさぬ顔調、駒澤様と玄た事が私が氣を知つて居ていろくの探り言殿様と私とい初對面の其日から水も洩さぬ二人が中落死でも中よみかなる心ハござんせぬひな、ヤ適貞女其頬もし心底を見込頼入度子細あり、何と頼まれて、下さるまいか、コレ又改つたお詞數ならぬ私なれど身又叶ふた事ならば、頼まれて下さるが、ヨシくどそふしてお頼といへ、頼といふ以外ならずと、すんと立て床の間の花生の櫻抜取て、瀬川が前又差出し、此花の車返し。

櫻の數も多き中取分人の賞翫するハ色香の妙成計でなし、散ば清き  
花の本性譬ていひ、そなたの姿又ア床の掛物ハ定て聞も及びつらん  
唐士の玄宗皇帝は寵愛の楊貴妃と沉香亭ミ引籠り、忘れてからんで横  
笛の音又聞へし二人が中天又有バ比翼の鳥地又有バ連理の枝と、契り  
合たる睦言も、果ハ馬嵬が憂別れまづ其のとく此花も千世も連理の榮  
へをと思ふ又かひも嵐といふ妨又合時ハ枝又別れの落花微塵アあつ  
たら花を散そふより、枝を分つて日影又生られ、仇又吹くる嵐をばよけ  
る思案がサ有そふな物、そんなら連理の榮へを捨て、手打とも人など  
がめそ櫻花けふ計とぞ盛りをも見めサとつくりと思案してくるまがへ  
花を散すか咲すか二つ一つ、色よい返事を待てると、花又心をよそへ  
歌詞残して駒澤ハ一間へこそハ入みけり瀬川ハ跡を見送つて、暫し詞  
もなかりしが花打詠獨り言、心ありげな花の譬アかけ物又なぞらへて、

ちらさぬ様との詞のはし、手折とも人などがめそ櫻花と古歌を引しひ  
 とどふかなと計よて、散來る花の雪よりも解ぬ思ひ打傾き、思案よ暮し  
 折からえ禿志ほりが走り來てやゝ太夫様助様がさつきよから待兼て  
 ムんす、早ふ座敷へ來なんせいな、そ、嘸待て居さんせふ。ゆきやん亥よ  
 とかい立ど、濟ぬハ胸の憂思ひ、心ハ摸稜の手を引れ、奥の座敷へ入よけ  
 り、様子立聞岩代多喜太、一間を出ればこなたよも、窺ひ出る赤星運八、岩  
 代様、聲高し運八新參の駒澤めてつきり諫言と思ひの外踊狂ふて俱  
 よ放塙、合點行すと物蔭より窺ひ聞べ兼てど此大磯へ入込瀬川共駒染  
 の様子、二人打寄じやらりくらり、花の譬へどふやら氣ふさい彌不義よ  
 極らば、こつちの爲よハ幸究竟放塙之助よ毒を吹込只一討よきやつが  
 寂滅、成程、趣向の段取適妙計若其手で行ぬ時、其時のコリヤ斯う  
 くと耳よ口、スリヤ松が枝より油斷を見濟しどつぱりと、ヨリ必ぬかるな、

合點とさしやきうなづきひそくと悪事み念を入智慧も同じ穴成狐  
武士心奥の間奥庭へ立別れてぞ忍び行、一雙の臂の千人の枕と賦せし  
詞の花々寐る、大内之助ハ熟醉の蝴蝶の夢や現なき傍よ瀬川ハ人志ら  
ぬ心よ思案有磯海深き思ひよかきくれて、寐られぬ儘よかたへなる覗  
引寄細と書取筆の歩みさへ強からぬみの男文字、アリよ引かへて、  
浮世の義理よからまるよ思ひハ紙や知ぬらん、志ほりくとも忍び聲、  
と返事も長廊下、おいらん何でござりんすと、廊の訛も可愛らし、アレ大き  
な聲えやんなど、云つて傍よ氣を配り、何かひそくさしやけべうなづ  
き呑込氣轉者袖よ隠して走り行、望月の影よ引てふ、夫ならで闇を便の  
駒澤ハ道の枝折を先よ立、瀬川よ忍び逢坂の鬪の角戸を押明て差足抜  
足忍び来る、それと見るより正体なき殿の寝息を窺ふ瀬川、そつと立退  
駒澤よさしやき渡す返事のみ、いつの間よかハ岩代が、一間の内よ覗ふ

共、二人へいざや白紙の封押切て口の内讀ぬそなりと岩代多喜太（アキタ）不義者見付た動など、云つし一間を欠出られべ二人へ恂り大内之助不義者待と刎起（ハサカサキ）て刀するりと瀬川が肩先、ばらりすんと切下られ、ノット計（ナットキ）よ倒るし深手、見向もやらず短慮の義興、駒澤覺期（カミヒキ）と切かしるを飛玄（カスミ）よつて身をひれ伏此治郎左衛門毛頭不義の覺（ヒツメテ）は、たつた一言（イチモン）や上たき一義有先（ヨリシテ）＼＼＼暫くお待下されふ、ヤ云な駒澤先刻より空寐入して、観へペ予が目を抜（ぬけ）てみの取やり不義でないといひ案外千万（アヘンガウメイ）、サ此岩代が見る共玄らず、ほてくろしい不義密通（アツチツク）に手討（ハンドウ）の刀の穢れ縛り上げて遙礪（ミツヅタ）ヤアく者共、駒澤めを揚捕、畏たと兼てより木蔭（カケ）又忍の捕手の面（マスク）、十手打ふり欠來り、腕を廻せどひしめいたり、ちつとも騒（アラハ）がす玄（カスミ）りと見やリ、ギア仰（アゲル）し科人呼（ハスル）ならべ手柄（ハラハ）又掬（ハラハ）て見よと云つし榜（ハカマ）玄（カスミ）ぼり上、待間もあらせず双方（ドウボウ）、小脇（オカミ）又組付腕（カムシハ）がらみ、さゑつたりと振（フリ）ほどき右

と左へづでんどう續てかゝる二番手が打込十手かいくいり、波ぐれを  
付込瀧落し、庭へ散亂三番手、大勢一同々打込を、四天拂々はらひ退秘術  
を盡す。衝らきよ取ひしがれてさしもの捕手、だじろく透を人疋ばらり  
く遙み投退。ア覺なき身を理不盡のほ成敗科極まらぬ其内にめつた  
又繩ハカシリナサぬと云せも果す岩代多喜太ヤア因かしたり大盜人、不  
義の證據ハ是爰よど落ちる一通差出せばおつとり上て義興公、開き見  
れ共下らぬ漢文、ヨハいかよど鞠れ果暫し詞もなかりけり、手負ひ苦し  
き息をつぎ、ヨハ恥しや、仮よもみのどりやりせしを不義徒とのほ疑ひ、よ  
らく無理との思ハぬと勿体ないおまへを差置、あだし心を持よふな、  
此瀧川でハムリませぬ、ヨレとつくりと氣を玄づめて其みよんで疑ひ、を  
晴してたべといふ聲も深手よける息づかひ、岩代ハせくら笑ひハ、ミタ  
んだり游へたりちんぶんかんの隠し詞角字で紛らす手も有事ヤアくわ

傍付の儒者淺井順藏此文体讀上られよ早くくと呼ひる聲、ハット答て一  
 間立出る淺井順藏件のみを取て逐一讀下し、是唐土の楊貴妃  
 が馬嵬が原にて玄宗帝より別れたる最期の故事をつゝりし文章不義の  
 詞に曾てなしつて聞て驚く大内之助、其子細々何とく、恐れながら  
 其下譯の駒澤めが仕らんとおめる色なく座より直り某伯父の頼み依て  
 國元へ下りし所養父了庵我を招き主君義興公鎌倉より身持甚だ放  
 弃は諫言ナ者ハ誰彼分す即座の手討是皆國家を望む佞人のなす業  
 先達て藥王樹をかたり取れ剩ざへ靈府の尊像紛失等閑ならぬ家の  
 大事汝我名跡を受繼鎌倉へ立越いかゞもして我君より諫言ナ奉り、  
 本心みなし参らせよと、くれぐの頼ゆゑ、委細心得いと、夜を日と繰  
 で當地へ參着仕れ共佞人讒者の妨みて目通りも相叶はず夫故忍ん  
 で廓へ立入詩文の流行是幸と添削又事よせ瀬川殿又對面し心底をた

めし先刻床の間の掛物と車返しの櫻を以て、歌よなどらへ無體の戀慕  
心の命を所望の謎それと悟つて禿を手引忍ぶ此身の勿体なや假よ  
も主君の思ひ人、又不義と見せしも國家の爲、逢ば其儘差殺し返す刀よ  
切腹と思ふよ違ふ此文章其身を捨しハ楊貴妃が馬嵬が原にて最期の  
心、君の興を本國へ車返しハ國家の納り、ヤ驚き入たる秀作名文遊女よ  
稀成心の操、君のお爲わざと仕手よかしりしハ譜代の臣が戰場のハ馬  
先の討死より、遙よ増る健氣の覺期、出かされたりと感賞の水を流せ  
る辨舌ハ實類ひなき忠臣なり、聞て手負ハ起直り、嬉しや本望や、ヤ殿  
様疑ひ晴して未來ハ夫婦と只一言、いふて聞して下さんせと、合す兩手  
又血の涙、義興公も不便さよ、後悔涙の聲くもらせ、ヤ我ながら誤つたり、  
駒澤と云ふと迄放埒墮弱の義興を、大切よ思ひ一命を投うつての志、コソヤ  
嬉しいぞよ過分などよ、其貞心を露程も、夫と知なべうつまじきよ、未來

ハ一蓮訖生と悔み給へハ手負の瀬川、聞ニ嬉しさ手を合シ、有がたや  
 忝や、其お詞が未來の土産嬉しう成佛致します、お前ハ目出たふ國元へ、  
 車返しの櫻花榮へ給ふを冥途から、見るが此身の本望ぞや、といふ物  
 のお名残ふしや、そも逢初し其日より、比翼の床のさしめ言連理とかい  
 す睦言又千代もかへるな替らじと、誓ひしともあだし世の、義理ゆへは  
 かなひ此最期、娑婆と冥途へ別れてい、玉の笄を幻し云傳やらんつて  
 もなく、嚙や輪廻よ迷ひましよ、名残をしやとは、ひ寄て、覺期極めし心よ  
 も、道女の愛着心見上見ふろす暇乞あへなく息ひたへよけり、義興公も  
 今更よ不便の涙たもち兼、こらへかねてはら／＼漲る瀬津駒澤も、  
 主君の心思ひやり、胸ニ満くる潦袖よ淵なす計なり多喜太もどふやら  
 底氣味悪く、此場黒める間ニ合詞殿は本心ニ立かへり給ふ上ハ我より  
 大慶至極此様子を帶刀殿へ相達し、俱ニ安堵をさせうさんと、詞工み

云くろめやしきをさして立歸る、涙拂ふて大内之助、<sup>ヤマト</sup>駒澤我國の  
主として、愚も酒色もふけり、詩文の道も暗かりし。他門の嘲り家名  
の耻辱、今を心改めて汝を師範も儒學をはげみ、主従心一致して寶の盜  
賊尋出し、誅をせんないか。／＼、＼＼、潔きに一言某君を守護するな  
らば、國家も仇する僕人ばら、瞬く内も詮議して、二つの寶奪返し、成敗せ  
ん。手裏も有、手始も眞斯と、云より早く小柄の手裏剣ねらひの松が枝  
どつさりと落る。運八拔討も肩先ばらと、大袈沙切、<sup>ゲザギリ</sup>適手の内見事く、  
早速歸館と供ぶれの聲も隨ひ數多の同勢、廣庭狹しと居並んだり、<sup>シテ</sup>  
立と駒澤が進める詞も義興公立出給ふに目も涙の玉や三つ瀬川流  
の里の泡とのみ消し命も色即ち是空、花の姿も仇嵐散行死出の山櫻、名殘  
の跡も残れ共互に耻る主従が、心も數珠の車返し花の櫻木武士の道の、  
道こそ、かんばしき。

## ○小瀬川のたん

冬の夜の、月の老女の粧ひてふ譬も凄き小瀬川の入江の柳春待て、眉作  
 れど彌寒き、風の手櫛みすきかへし白粉ならで置霜の色もきらめく汀  
 の岩打寄浪も氷いて、冰柱み下る計也。在所親仁の波かくと、月夜み外  
 開構わんばう、逃灯提て繫ぎたる渡海の船み打向ひ、五郎太船の婆様  
 今夜もどふぞ病人みお守りを戴かしよ來て下され、迎ひよ來たとぞわ  
 めきけり、斯と聞てや歩を渡し、船を出るも杖突の、りかい着物綿帽子  
 漸々陸み上り、タダベ往た木村の衆がまだ病人の本腹さえやれぬかさ  
 れぱいの夕べに守を戴かして下さつたので、よつ程驗が見へ升た、どふ  
 ども一度戴して下されと云ふ老女の、安いとくこなたの娘み限らず。  
 若い女子の病氣なら戴かして進せふ。ア佛氣な婆様禮み小麥園子の  
 雞炊汗の出る程振舞ませぶ。コレ婆様怪我さえやるなど、追従口足元照す

挑灯より月夜よ光る茶瓶天窓打連てこそ急ぎ行跡へうろ／＼二人の  
悪者、そこよ爰よと尋來て、ヤイ權よ爰よも幻妻げんさいのふらぬぞよと、いへパ權  
七、ナシめんよふな體よ此道へうせた筈はず玄やム姿の見へぬナシどふでも  
此柳やなぎの様子でハ幽靈ゆうれいで有たも知ぬぞよ、ナシうす氣味きみの悪いといふ。ない、  
どこの世界せかいよ紫縮纏むらさみまつりの振袖着ぶりそでて、足の有幽靈ゆうれいが有物かい、一体おのれが  
間拔から折角見付た鳥を取逃したひい、爰な大ならずめ、何玄やなら  
ずじや僭おのれこそどふあほうの間拔玄やいはい、ほんくくぬか玄やまやけ  
じやと、つかみかしれば我武者がむしゃもの組づころんすもみ合しが、いつそば  
らしてこまそふと腰成刀こしせいとうよ手をかくればナシこいつハ面白いかハハ  
我がどす開く間此手が玄いはと仕ていよかい、あんたらくさい其頬ほほけた  
をと大だらを抜ぬけべこなたも抜合ぬけあし、立向ひしが月影つきかげよきらめく刃の尖する  
どさみ互たまごためふひ跡あとえさりナシ待まて、我とおれが爰で切合たら

どづちやが死るか志らね共、跡よ残つた囁や坊主めがけふり戻るか翌  
戻るかと待ほうけみなりをるであろ何と互み様子を書置して其上  
で勝負せふかいチヨリヤよふ氣が付た志かしわゞや紙や筆が有かいなふ  
てかいく紙も矢立も爰も有ひい、か待よ始を何と書た物で有ふ、テ志  
れたと覺一つと書やい、ア何ぬかすぞい夫でハ受取のやうなひいそん  
なら待よこふつと一筆示し乍りヤそれでハ姫の状見たよふなどぬか  
すで有ふ、有ぞく一筆啓上仕ひ、それでハ年頭状のよふなれいそ  
んなら待よ、思ひ出した先書置の事、成程ゑいい、其次ハモ我等こそ  
此度商賣の人買出入付切合ててこねやし、是迄人の物をいかみ  
ひへばとふで地獄へまかりやすべくし、どふぞ佛の手下となられるよ  
ふ問吊ひ頼入ゆい死る此身ハ構へすしへ共、跡このはん米のと氣よか  
りやし、南無阿みだぶく、何と哀れみよふ出來たでハないかと云ふ

勘太が涙ぐみ、よふ出來たが成程われがいふ通り死だ跡でいかしや娘がひだるいめしてほへるかと思や、おりやくいちらしふ成て來たと聞て權七泣出しおれが嘆い懲嫁を引して間のない此書置を見をつたら又玄やりみ出みやならぬかと、ほへるで有と思へばおりや命が惜ふ成て來た、おれも死とむないおれもくと双方がほうづき程の荒涙はらり、はらくく玄やくり上し正具の鬼の目からの涙なり、ナシト勘太よおどやどふも死ともないどふぞ助かりたい物じやが、有ど、有ヨリサレバイわれと中直りさへすりや死いでも大事ないじやないかいまほんよそふじやいそんならもふ中よしと成て、此邊を第一遍尋ふか、そふじやくこんなよいちへが初手から出たら書置迄して泣まい物、下司の智恵の跡先よ氣を賦れよどうろり眼風よ騒げる磯際のあしよ任せて兩人、左右へこそり、尋ね行、山鳥の初尾の鏡影ふれ、

て、見ぬ戀人と、一すじよこがれくして、身よ積る、深雪のやしきを玄のび  
 出、心急げど行なやみ、石よつまづき打倒れ、暫しゝ起も得ざりしが、よふ  
 よ起上り、嬉しや、今、の悪者の油斷の間よ、是迄逃て來たれども、生  
 ながらへて、耻の耻、逆も此身のなき者と死る覺期の玄ながらも、心が  
 ミリの母様の、とを分ての、意見を、聞分ぬのみならず、死る私、が不孝の  
 罪、逆様ながら一遍の、廻向頼み上升る、又二つよ、乳母淺香、嚙や夢よ  
 も現、よも尋迷ふて、歎くであら、死る此身のいとねど、跡の歎きを見る  
 樣な、ゆるしてたべと詫涙、又戀しい阿曾次郎様、此世の縁の薄く共、赤  
 来、添て下さんせと遠があざなき娘氣よ親を思ひ夫をこひ、わつと泣  
 音よ小夜千鳥いと哀を添みける、風よ音する古木の柳、きつと見上て  
 打黙き、涙ながらよかゝへ帶結ぶかひなき惡縁と、恨ながらよとくく  
 も枝よ打かけ死覺期、なむあみだ佛の聲もろ共、既よ斯よと見へたる折

から、戻りかゝりし以前の老女、それと見るにかけ寄て、<sup>コレ</sup>待た待ちやんせど、抱<sup>だき</sup>留られて深雪の悲しく、<sup>イモ</sup>く放して殺<sup>ころ</sup>してと、あせるを猶も押留見れば若い女中のかちはだし、男故の欠落ぢやの夫なれべつぼみの花をちらそふより、命さへ有ならべ、戀しい人よ逢れない物でもないと、なだむる詞<sup>ことば</sup>よ涙ながら<sup>チ</sup>、よふいふて下さんした去ながら、やしきを抜て出ながら、ふがいない女の身、所詮<sup>しょせん</sup>添れぬ縁なれば、どうぞ死して下さりませど、又立上るを乞つかと抱<sup>だき</sup>留<sup>とめ</sup>、悪い了簡<sup>わざん</sup>、わしが留るかられこなたの玄たふ戀人を、尋さがして逢して進せふと、いふよ嬉しく<sup>エ</sup>、そんなら戀しゆか人をペ、尋て逢して下さんすか<sup>ミ</sup>、嬉しう<sup>ム</sup>んす忝いと死る覺悟<sup>かくご</sup>も今更よ色よ引るゝ戀慕<sup>れんま</sup>の闇<sup>やみ</sup>、心迷ふぞ道理なる、かゝる所へ以前の悪者たゞね戻てうそくきよろく<sup>のみ</sup>呑取眼<sup>のど</sup>、深雪の顔差覗<sup>のぞ</sup>き<sup>ヤア</sup>爰<sup>ツキ</sup>おつたか一遍と搜<sup>さが</sup>しおつた、こつちへうせうと手を取ば、老女の突退<sup>つきのけ</sup>

深雪を圍ひ、此女中を何とするのぢや、女中こちへと手を取て行を押  
 留立塞り、どこへく其幻妻へおいらの網よかゝつた鳥脇目ふる間  
 逃さらしたこつちへおこせと攔み付二人が腕首ぐつと玄めはづみを  
 打て投付られぬり豈ながら我武者もの起上りて立かしる勘太が頬へ  
 ひつをやりと當る小判の一包アハと名らひめよ合志やがつたと云つ  
 り取上ヤア金と、いふよ權七手よ取て、コロヤ小判で十兩計、負てこませ  
 と分口し、元來し道へ立歸る老女の跡を打見やり、テ悪い者共、シタガ十兩よ  
 ハ安い物エバ此間よ早ふと手を引て袂より出す呼子の笛ふつと一息  
 吹ならせば相圖と見へて元船より苦押上てかけたる歩み深雪を伴ひ  
 乗移れば直よ歩みをてつ取早く碇引上もやいを解權追取て沖中へ半  
 段計漕出す折から砂道章駄天走笛をかけつてせきよ關助斯と見るよ  
 り聲をかけ、其船待た待やいと呼べど聞ぬ振窓より差出す深

雪が顔ニア、娘様か、關助かと、云ふとするを引戻し、障子びつをやり跡白浪  
陸シカよりあせる關助の後へぬつと權七勘太、折角かゝつたよい鳥ハ、手ご  
いばしめよ上られる、せめておのれ、債おのれがわんぼふを引ばいで腹いせと取て  
かるを引ばづし、面倒おもひなど拔打まつから、真向まむきなしわり拜討まつとう倒おちる、死骸しがいよ  
目もかけず、心ハ矢猛磯たけ傳つたひ跡あとを立たて、追おて行は

### ○摩耶が嶽だけのたん

雲鑿ういさくとたな引ひし、摩耶マヤが嶽だけとて津の國つぐと、播磨はりよまたがる、高山あり峯みね  
高たかうして雲くもよ冲ひらり、谷深ふかうし真落まらく通こけす苦滑くわかなる岨道そよの巖いわ、鑿のみよ削けつ  
るが如おく、常つねよ馴なれたる山賊やがつも、足踏迷あまきよ轍わだ、嶮岨けんそなり、かる深山の懷いだよ自然  
なる岩窟いわくつも、いつか住家すみやとなし初はじて、住馴なれしたる岩疊岩いわゆらの屏風びやうよ這はから  
む、薦たての紅葉べにはなながらよ、書きなしたる如おくよて、おほらしくも、又物凄すさまじ  
し、此家の主荒妙あらたい老おの手業わざの手てもだゆく、賤しづかがうみ亭をも髻しらべの、白髮しらがよ紛まぎ

ふ雪の朝椿山茶花折持て娘千里立歸りやかく様けふの爺様の祥月  
 命日亥やと云亥やんした故谷蔭で折て來た此花は前様へ備て下さ  
 んせどいふよ老女の打黙き、それによふ氣が付たおれがさそふより  
 そなたの手向が佛へ駆走佛檀へ立てお亥やく合點でござんす。  
 やかく様ア浮洲はまだ戻らぬかいな、皆の者と夜山よいたがまだ  
 戻りおらぬモ遅いとで有此雪で冷るで有ふ早ふ戻り亥やら  
 いで、そなた何で浮洲の遅いを案じるぞと咎められて氣轉の笑ひ  
 ハハかく様と云たとが色の詞咎召遣ひの人にや物案にも仕升  
 ふかいなそれへそふといつやら連て戻ら亥やんした女中、どこへ行  
 亥やんしたへ娘と云たとが様の根問葉問其女中の此間播州邊の  
 よい衆の所へ奉公又やつたの亥やいの、それアいとしい事、人も通  
 ひぬ此山中遣ふ物とて荒こましい男計、折の若い女子がくるけれ

といつの間又やら皆奉公、分て此間の女中の媚も心も志ほらしそふな  
人、よい咄し連と思ふた又是も又奉公とやそれならそふと暇乞でも志  
ていたがよいと聞へぬ人やと恨言女同士とて志ほらしき老女の聞も  
うるさげ又、かけも構へぬ他人の事くどくと云すと早ふ花を手向  
ておざやと苦い顔付氣の毒と千里の花を携へて佛間をさして入よけ  
り折しも雪道踏みて立歸つたる三人連縛り上たる里の子又泣音を留  
る猿轡或い衣類旅荷物、鎧よかたげて内み入、ア頭精が出升のヲ皆戻つた  
か、ト獵が有たかと、いふよかんまち猿辻り繩がらみ投出し、昨日から  
の大雪で人通りはとんとなく、よふくと向ふの村からうせをる奴々こ  
いつよい仕事と稻村かげからチイと呼だら、サふるひ出しきざる志め  
たと思ひ引捕へたら八十位の老耄め引剝だ布子下着帶の小倉の花色  
鳴、まんざらでもなきと、自慢らしげよ投出す、次の山蛭洞八が、十二三

な小女郎を突出し、おれが張場も人通りがなふて、どふやら此がき一疋  
 豆腐買ふうせたのを引とらへて顔見れば小志ほらし頬付ゆへ、引か  
 たげて戻つたと語れば老女の苦笑ひ、塙の明ぬつまみ錢シタガ浮洲、わ  
 れが仕事はどふがやいやい、イヤモ新米の此浮洲どふぞ頭の氣よ入様なよ  
 い仕事と思へども、拵大雪でよい鳥もかゝらずよふゝ、山伏めを引剣  
 た兜巾篠懸珠數輪製蓑夫から夜更て長崎飛脚逃足早ふ逃をるを退か  
 けて引たくつた荷物の内に人參が十四五兩珊瑚樹が十二三金が一步  
 で十五兩跡はござくがらくた物帳合を頼み升と一様よ並ぶれば  
 老女のそれく帳又付、出來たく猿辺りも山蛭も嗜めく新米の  
 浮洲み花を取れる心がけが悪いからじや、シタガ仕事はまん物マア酒でも  
 吞で晝の内に休めく、ナット合點じや、コヤ又聲が高いわい、常からも云通  
 り、氣の叶はぬ娘ゆへ、追剝の人買のと聞たら虫が出るよ寄て、獵師商賣

といふて有程み、わいらも隨分知さぬやう、其ちつへいものいつもの鳥や  
へほり込でおけ、合點夜通しよ、ふるい上つて、陰囊を、猪雜炊焚熱燭で  
と、情も忘らぬ牛頭馬頭ども、泣入小娘引立て、勝手へこそい入みけり、岩  
が根の雪より忠義よ凝たる關助深雪が行衛爰かしこ、尋ねさまよい思  
はずも、此岩峒尋來て斯と見るより内々入卒爾ながら此家の内へ、年  
の頃十五六で、やしき方の娘也、もし吟ふて見へませなんだかと云  
ふ老女の心の合紋扱い由緒の者成かと、思へど態とさあらぬ顔、全くそ  
んな女中へ見請ませぬ、それを何ゆへ尋さつ志やる、されば拙者へ  
藝州福岡の者子細有て主人の息女若氣の至り又やしきを出其又翌日  
小瀬川でちらと見た船の内呼と叫べど届かぬ追風、モかいくれよ見失  
ひそれら陸を方よと尋るよ、此麓の里人よ問たれバ、ヨ、丁度其格好の娘  
を六十有餘の老女が連て、此山中へ登しとの事故お尋ナシテ此家外よ

家でもあるかな、と有共く、坂を左りへ取十四五丁行ば獵師の家が  
 有そこへ往て尋ねさつたやれ、近頃添い氣せきよござればもふお暇  
 と欺る工みも白雪の道踏分て尋ね行始終小陰くわいと覗ふ手下指足さしあしして  
 お頭かしら。今いまの奴が口ぶりにどふやら先途の仕事を、ヲ眼付まつおつた様子、ヲか  
 し家のない山中へやつたれば、まい戻つてうせるハ定、足あしが付つてハ面倒めんどう  
 な、ヨリヤわいら追付おづけて谷へばつさり、ヲ呑込のぶくだと猿さる辻すべり、山蛭やまひるもう共關助おうかんすけが、  
 足跡あしき立たひ追て行引違ひきしりて入來る武士、門口もんぐち立留たどり、荒妙殿あらむだい在宿ざいしゆくかと、云  
 つゝはいれば老女の不審ふかん、ヲついよ見馴みなれぬお侍様おしやうじやう何方からなんぱのほ越し、何  
 わともあれマアく是へと請うそすれば、會釋ゑしやくもなく上座じょうざへ通り、ヲ身共しよから蘆柄ろば  
 傳藏だいちやう、山岡玄番殿やまおかげんば一味の者、則まことに玄番げんば密事ひみじの使者委細いさいの義ぎ書面しょめんと、  
 取出とりだしし渡せば老女の受取うけとり、ヲ是はマア遠方とほの所、殊こと難ひじ所の山坂さんざんをほ  
 苦勞様くらうじやうやと、云つゝ手紙てじ取出とりだしし、封押ふうひや切きて口の内うち何か心こころ打うづ黙まき、そん

ならお前も玄番様と、サ疾より合体身共の藝州岸戸家の家中兼て玄番殿と心を合し謀反の密談然るゝ駒澤了庵が養子治郎左衛門と云やつ鎌倉表へ参り放塙の大内之助を本心より立歸せし猿智惠此奴いか成術を以て薬王樹を奪返さんと計るまじきよりあらず万事より心を賦られよとの傳言、成程此密書も其事、ちつとも油斷致しませぬと譚りながら山岡様へモサ心得ヤた、ガ身共の外より所用も有べ最早暇ヤそふ、それより余りおせひし、何なく共に酒一献、又重ねてと立上り出るを見送る互の目禮、老女ハ一間へ蘆がらも、二足三足立出しが、何思ひけん小戻りし、内を窺ひ小黙き、奥庭として忍び行

○摩耶が嶽のだん 三段目の切

冬されば人目も草も枯果て殘るも淋しき軒の松枝吹ならす雪風、いと  
い寒氣ぞまさりける、納戸を出る浮洲の仁三、寒さ凌ぎといろりのそば

梶打、くべてほかき守衛士よりあらぬ焚火より、戀ゆへもゆる胸の火の  
 畫も消ざる物思ひ、娘千里の母親より忍び出附、仁三郎いつ戻そ  
 やつた、ダベりきつい大雪で、内い居てさへ寐ぐるしさモヤわ恋やそなた  
 のとを案じて計居たわいなど、詞ことばを玄波すいはよ寄添よもぎべ、色をふくみし雪の海  
 山の奥おくさへ浮世うきよなれ開、千里様それによふ案じて下さりましたのふ  
 こゝへ来て新米の此私を、玄なつこらしう云て下さり升あがので、陰ながら  
 慢んまんで居ますいいな、玄かし夜よ持かせぐ爰あその商賣、雨降あめふる晩ばんや雪の夜でなけれ  
 ペ、よい鳥とりかしりませぬぞへ、ア夜よさりでも鳥とりを取とのかや、お前  
 も素人しろうとの娘か何ぞのやうよ、鳥といふり、チ人チヒト、キやつぱり取玄とくげんや  
 何が其鳥とりめが雨や雪が降ふると聲山立て人ひとを呼よでも、キ人チヒトを見てもよふ動はな  
 かぬので、取よいといふと、聞て千里の打玄とくげんはれいかよ世よ渡わたるたつ  
 き迎むか寐ね鳥とりを取ときつい罪つみもふ是からそこそんなど、止やめてほしいと入譯いりわけを

白齒娘の氣も弱く耳を押へて差うつむく、氣の弱い何ば其様よい  
やがらしやつても、寝鳥ねとりの愚猪狼おろかしょおぶかみより恐ろしいとをする、レ智様ちさまをとら  
ねばならぬぞへ、マちつと嗜たじまんだがよござり升のぼり升のぼりと打詠うちゆうめ、  
王詞  
いやらしいそんな事聞きどふ、ない私が好すきの殿とのごといふハナコレ仁三郎ひら日ひ  
外さやからシ様さまが連つづて戻もどらしやんした女中めいちゆう様さま子こを頼たのんで文ふみの數へんじ返事かへりのな  
いへそりや聞きへぬ、モ今更云いも耻はずかしけれど、人里ひとざと遠とおき此内このうちへ初はじてお玄くわん  
やつた其時そのときからいとしらしうてきつとして明暮あけくれ思おもひ増ますかゞみ、紅白粉べにしらゆ  
も、シふぞしてそなたの心こころ又また可愛かわいと、思おもわれたさの化粧けしやう水みず何なんと云い寄よる詞ことば  
さへ灘なだの、鹽燒しおやき下燃下もどえこがれ暮くはれして海士衣あさごろも涙なみだと筆ふでの濡ぬれみみも、戀こゝろのいろは  
の手習てのなまえ袖そでえ付つてふ住吉すみよしの神みわの影かげの合あす手ても、嬉しい逢瀬あはせを求もとめ塚つか生なま  
田たのもりの幾度いくたびか、運はらぶ心こころをちよつとでも汲くでくれたがよいわいなど、  
男ひきの膝ひざと取と付つけて、赤あからむ顔ほほ夕ゆふ日ひ照てる摩耶まや紅梅かうばいの色盛いろより花はなも耻はずらふ風情ふうけい

也見るかげもない者を度の心遣ひ嬉しいけれどおまへに主なり  
 わしの家來いかぬ商賣がらじや迎主の娘を盜む、主の娘と忍び逢  
 も否物と有様の遠慮して居ました、<sup>ト</sup>眞實思ふて下さるならいかぬも  
 せふなど玄ませふが、<sup>シテ</sup>お前も無心がある何と聞て下さりますか<sup>ア</sup>、わ  
 しが願ひさへ叶へてたまるなら<sup>モ</sup>どんなどでも聞へいのふ、<sup>ト</sup>そんなら  
 つかみ様が大事としていや玄やる女の病を治す守<sup>サムライ</sup>、そつと見せて下さ  
 りませぬか、夫の安い事なれど、<sup>ア</sup>お守の二重箱<sup>ヒメイカナ</sup>と入て鏡<sup>ミヤク</sup>をおろし鏡  
 のかゞ様が肌身放さず持て居や玄やんすれば、首尾を見合せ見せふ程  
 ようちよつと奥の間へそふざやと云て畫中<sup>ヒル</sup>よ、<sup>ア</sup>コちよつとおざや  
 いのと無理<sup>ア</sup>手をとる筐<sup>カタ</sup>栗<sup>リ</sup>の、我から落て草の露濡<sup>フロハタマ</sup>行身ぞわりなけ  
 れ、折から坂道いつきせき、駕<sup>カ</sup>を昇<sup>ス</sup>せて輪拔<sup>ワカハシ</sup>吉兵衛<sup>ヨシモンエイ</sup>遠慮會釋<sup>エントウカイセキ</sup>も荒くれ物  
 雪踏<sup>ホコ</sup>ちらし門口より、婆<sup>アマ</sup>様内<sup>アマノ</sup>みかちよつと逢ふと、わめけば納戸を立出

る老女のあたり見廻して、それと見るより落付顔、誰かと思へば輪拔  
殿大きな聲で何とぞ、何とでもない此中百兩で直を極て預つていん  
だ代呂物なだめても偽寄しても只めろくとほへる計、勤奉公へいや  
じやどどふぱり間がな透がな透支度、顏よ似合ぬ玄ぶとい女郎じや  
れいの入込の内え取逃してへこつちの大損、事のない内代呂物戻すと、  
小腕取て引出すひ世え秋月が娘の深雪泣はらしたる目の内え溜る涙  
の玉の緒も絶ず重る憂思ひ、其儘庭え泣居たる、又玄てもく、云事聞  
ぬばいた女郎レ吉兵衛殿折檻して又相談せう、替りよハ不足なれど夕  
べ手まへた小女郎め行口が有なら頼ますと、庭の小屋より以前の小娘  
繩付の儘荒氣なく引立出て見せけれど、輪抜玄ろく打眺め、年ハ往  
ねどまんざらでもない代呂物相談の跡えして、予預つて眺ましよど、纏  
へほり込先え立泣入深雪を白眼付、むだ骨折したどう女郎と謐々立

歸る跡よと老女おとめが尖り聲こゑ、何所へやつてもはり戻される、玄くろふとい子や  
の小瀬川で身を投なげふとして死る命いのちを助けた上、大まおほい拾雨ひしやといふ金迄  
入いけふ迄養やしおふた義理ぎりを忘れ、奉公むねごいやがる恩おん忘わすらすめ、賤いやしう育そだたぬや  
つと思ひ、手ぬるふすれば付上つじあるア爰あいな糟賣ぱい女めがうぬコリヤもふそろ  
くと痛いたい療治りょうじをせよやならぬぬいのと、焼返やきかへつたる圍爐裏いろうりの鏡橋てづきばし、片  
手てよ握いざなつて目先まきへ突付つき、サアああ艾あいいらすの一つ炎ほ其美くしい顔ほおへすよよふか、  
サアソレ頬ほがままちを突拔つきぬか、コレヤどふぞ御堪忍かんにんサアああそれ程かずよ悲しくくわいべ、丸山  
へ賣うれて行ゆと、云いれて深雪ふかたごの涙聲なみだごゑ、丸山まるやまとやらは聞及きそくふ唐土とうど船ふねの湊みなと  
やらは情ぜいなや唐國からくにの人ひと、肌身はだみを汚けがさるる、君傾城きみかたの憂勤うきう、是計これりは了了りょうりょう簡かん  
トト、そんなら日向ひのひへ奉公むねごムシナ日向ひのひとは夫おとこよりも遙はるか遠とおき日の本もとの、  
果ごと聞きバ猶悲しいうどふぞ都みやこへ只ただの奉公むねご水みず仕つかひの勤きめいもいとひひ亥いませぬ  
お情おきさお慈悲めぐらしと計はみて只手ただてを合あせ涙なみだ居ゐたるる、味あ味あな事こと云いわろわざややい

のふ水仕みずみやつてハコレ金きんみならぬわいの、くよい子こじや程ほどミテ恩返  
しざやと思ふてナレ此婆ほトム設せつさして下されいのサアそれハ但し此鉄橋てつ  
が喰くたいかアコシヤいやかく何のく何のいやとテ、ませふくくナ  
賣うれて行かサアそれハチアくいやら殺すがどふじややい、ナア返答へんとうせい  
女郎めと嘗なまる聲は囁付かひ如く肝きもムコたへて此世から掠落くろちゆうム沈む憂思ううき、  
悲かなしさ剛ごうさ恐ろしよ、涙なづり胸むねム陸奥みちのの安達原あだちの黒づかくろづかム籠こもれる鬼おにの呵か  
責せめムも増まする責苦せめぐム絶兼たまて、遂行ついぎ衿髮きぬがみ引戻ひもんし邪見じやけんの老おの皺腕しわうでム引すり廻まわ  
し責せめつてふ、見兼みまて千里せんりハ走り出だミシカム様餘ようよリじやくく餘より  
じやわいのいとしほなげム此女中めいを、情らしう助けたのキ命めいの親おやのと  
言こと玄くつやん玄くつても君傾城きみけいじやうム賣うムとのよふ胴欲ともよくム言ことれた事、賣うひでならぬ  
事なればかひりム私わたくしを賣うてたべと、縋くわり留とどるをふり放はなシ娘むすめ、そなた  
の知した事ことじやない、そつちへ逼のていやく、アバく何なんばふでも此子こは賣うば

ぬわしをくど争ふを、面倒など突返けて、かよひき深雪をてうく  
 焼鉄橋の續打アット一聲反返り其儘庭み倒れ伏、ういとしやと泣入千  
 里老女も今更詮方せんかたも鞠れ、果たる折こそ有麓の方より手下の眼太息を  
 切て欠來り、コレくふ頭大名の金飛脚此麓で追取卷まぶな仕事と仲間の  
 者汗水かけ共手強い奴どふやらこつちが覺束ない早ふ加勢と言捨て  
 飛が如く又引返す聞より老女の恸り仰天浮洲の居ぬかといふ内も老  
 のいら立傍なる心よ覺の一腰かい込、裾こもパセ折て駆出るを、  
 留る娘、引退く力足麓あしづをさして走り行跡よ娘のうろくとあなたこ  
 なたを氣遣ふ内、一間を出る浮洲の仁三千里の見るより、よい所へ仁  
 三郎様何やら事が起つた逆かく様の今麓へガマ差當つて此女中をどふ  
 ぞ助ける仕様のないかな、サどふといふて外よ何よも、ハレ幸ひ頭の留  
 主の間え、令の守をサア、早ふ、アツ合點も女房顔千里の納戸へかけり行

浮洲の深雪を抱抱へ胸撫おろせば手よ障る守り袋の中改め、<sup>詞</sup>藝州岸  
戸の家中、秋月弓之助が娘深雪と心よ一思案手早よ納る程もなく、娘  
の守の箱携へいそくとして立出る。<sup>詞</sup>どふやら斯やら取て來たか  
と様の戻らぬやんせぬ其中よ早ふくと手よ渡せば、箱追取て敬よ敷  
深雪が額よ押當れば守の奇特忽よ、息吹返し邊りを眺め。<sup>詞</sup>おまへ娘  
ほぞ氣が付たかへ、嬉しやく。幸ひかと様に留主なれば、此間よ早  
よ行玄やんせと聞て深雪の飛立計嬉し涙よくれ居たる、ゆく女中、此坂  
を左りへ取ひ影へ出る近道頭が戻らぬ其内よ、サチやつとくとくと  
手を合せ、添ふござんする死でも、恩よ忘れじと膝もわなく立兼て  
漸遁れ落て行、浮洲の守よ目も放さず、何思ひけん有合鉄橋取より早く  
守の箱はつしと碎バ驚く千里見向もやらず、錦の袋中を出る状取上、<sup>詞</sup>  
拵こそく、山岡玄番の内通の密書、又此守こそ大内家の重寶薬王樹拵

ハ主の老女と云ひ大友の殘黨謀反人の同類よなど聞て千里ハ何と云  
 んす。かゝる様を謀反人とハヘ、先年玉橋の局と偽り大内家へ入込、藥  
 王樹を銜取しハ此家の老女縁よつれたるふとなれバ妹脊の縁も是限  
 りビ詞尖ことばするき云放し、一間の内へ欠入り娘ハ悲しさアはつと其儘そこ  
 ミ泣倒れ正體涙の折からム斯かくとハ志らず主の老女、心も足もいきせき  
 と我家の内へ欠入り破たる箱を見て恸びびくリヤア娘大切成守の箱、何者が  
 此仕業しわざ子細しきハどふ玄やくと問詰どくづめられ、隠し持たる懷劍くわいけんを咽のんみが  
 ペと突立たり老女の恸り其手す繩さがりヨリヤア娘何故の此最期と抱かゝへ  
 て介抱かいぱうム娘ハ苦しき息を纏まき、かゝる様堪忍して下さんせ、語るも便なき  
 事ながら、戀の媒頼あかだちんだる義理ぎりを思ふて最前の女中めいちゆうを助たすんと、仁三郎様  
 の差圖さしづよまかせ大事の守を取出し戴いたさせバ忽こつ々息吹返す即座そくざの寄特きとく幸  
 ひ此場を落せしが思ひも寄よす仁三郎様守の箱を打碎くだき中なかよ添たる狀

を見て情なやお前を謀反人の山岡とやらが同類逆折角結んだ妹背の縁切放されし其悲しさ、逆も添れぬ惡縁と思ひ切ても切られぬ因果斯成事も大切な寶を失ふ計りかへ大事を人よからせたる云譯なさの此最期と語るを聞いて老女荒妙眼をいからし聲ふるいしう。扱い浮洲の仁三といふハ古主の仇たる大内家の廻し者で有たよな、それとも立ちず氣を歎し折角手入寶を奪へれ現在娘を殺せしも元の根ざしア二才め、撫殺して腹いんと身縊ひして荒よ敷、一間の障子引明れば、内ますつくと浮洲の仁三以前の姿引かへて、進賢の冠羅綾の唐腹寶を守護して立たるハ股をくぐりし韓信が大元帥の位付拜賀を請し勢よあれし老女も氣を呑れ只忙然たる計也強氣の荒妙高笑ひ、ア納過たる汝が振舞娘の敵寶の盜賊、ア觀念せよと詰寄バ、ちつ共動せずはつたとねめ付、ア盜賊との案外なり得より入込某こそ浮洲の仁三郎

どハ汝を計らん飯の名誠ハ大内家の隨臣駒澤次郎左衛門が弟同苗三郎春次也我幼年の頃父了庵又勘當請成人又隨ひ先非を悔て大明國へ押渡り彼地の醫官と迄成しか共日本又在す父の慕しく仕を辭して歸朝せしよ父ハ早病死の跡思ひ合せば近曾多々羅の濱で怪しき老女慥々藥王樹の盜賊住家ハ摩耶と聞しゆへ大友の殘黨浮洲の仁三と僞り此家へ入込今日只今紛失せし藥王樹を奪返せしも娘千里が志難面我又探を立生害せし貞心義烈謀反の餘類と云ながら過分至極と落涙を聞て老女の物をも云ず持たる脇差腹又ぐつと突立れば何故の如最期と取付歎く手負の顔打眺め涙を浮めミ是非もなき如運の末誠に身の我子又有では主君大友宗鎮様の忘れ筐菊姫君でござるハいのミ、ナ合點の行ぬハ尤ムア思ひ出せば二昔ハ父大友宗鎮様足利の天下を掌握せんと謀反の旗を上給ひ討手遅しと待所又案又違はず大内

義隆手勢すぐつて三万餘騎、豊前の國へ攻下り小倉が城を取圍み、息を  
も繼ず、揉立る、味方も爰を破られじと、矢種惜まず差誥引誥射出す、矢先  
の雨あられ篠を乱して降びとく、矢庭又城下の死骸の山、初度の軍の打  
勝しが、其後數度の合戦、又大將始數多の軍兵、水の手切て落城す最期の  
際、又宗鎮様、わらひを近く招き寄せ其方何卒姫を伴ひ落延て命ながら  
へ守育、成人の後、尼共なし、父が菩提を吊らせよと主命辭する所なく  
漸城を落延て毒蛇の口をのがれしそや、再びは世より出さん物と海賊人  
買の悪業も、まさかの時の軍用金又玉橋の局と僞り薬王樹を奪取しり、  
大内家を滅亡させ二つ又の祈禱と寄媚よき女を見置いて手下又云  
付拘引君傾城又賣渡せし、其罪科が報ひくて姫君の身の仇と成た  
るゝ皆わらひがなせし業、赦してたべと取付て悔歎けべ菊姫といど  
涙よむせかへり、自迎も仇よなしたる身の徒、そなたの最期も自故、こ

らへてたもと計りよて歎けべ老女の猶せき上、よふ云て下さつた。想  
をも知らぬ老の身の死るゝ元より覺期のまへそれゝ引かへ姫君の轡  
こがれたる其人ゝ、一日片時添しもせず、盛りの花をむざくと無常の  
風かぜよちらすかと、主徒手も手を取かひしわつと計りよむせ返れば、心を  
察し春次も不便と見やる兩眼りょうがん、またばしる涙はらくくふり積雪も  
一時いつよ解わかて流れて、谷川の水も淵ふちなす如く也、斯る歎きも白雪の道を蹴  
立て欠來る關助庭先へ踊り入おどりいア我わを歎き山路も迷さまよせ、討んと謀りし  
狸婆たぬきば天罰報てんばくぼうふてくたばつたか深雪様を拘引何所へやつた、サア眞直まっただ  
白狀しらじやうひろげ何とくと詰寄つめよれバ三郎聲かけ先待まつまつれよ、我こそ駒澤了庵  
が二男三郎春次也とくより此家へ入込いりこで始終の仔細こざい皆聞きこた邊ほとりが  
尋る深雪といふ、我兄次郎左衛門と兼て縁邊えんばんの契約けいやく有こと某兼て聞  
及ぶ最前守りよ書付有て秋月が娘むすめと察さつしたる故此家の千里と云合

せ都をさして落せしと聞て關助小踊し、有難しくお禮の重ねて心  
もせけば早暇と欠行向へ蘆がら傳藏飛で出ア聞たく、浮洲の仁三  
と云ひ大内家の浪人、此通り山岡殿へ注進と逸足出して欠行を、と打  
たる小柄の手裏剣、たじろく所を關助付入抜ても見せずから竹割ボ潔  
よし、山岡玄番が逆意の企得よりそれと知たれども紛失したる靈  
符尊像奪返す迄荒立がたし、此密書をおどりみして玄番を亡す我術必  
堅固で關助と勇立たる其有様、手負の老女の聲を上チ、適あつまれ只痛いたいし  
きの菊姫様最期さいごと婆ばが一つの願ひ、此世の縁ゑん薄く共未來を結ぶ夫  
婦の盃聞届て下され春次様ホ切成老女が願ひ、任せ盡じん未來迄替らぬ夫  
婦半座はんざを分て待れよと詞こと々嬉しく二人の手負、手を合したる悦び涙なみだ  
其媒ま此關助と心を汲取かいけ杓是や末期の水盃冥途みづがめいとの旅へ嫁入の  
儀式ぎしきをまねふ三ゝ九度、苦しき中なかもよつこりと笑顔わがほの婆婆しゃばの色直し、

雪の白髪の尉ならで姥もあへなく介添の彌陀の淨土へ犬張子血しほ  
の紅え染てやる野邊の送り火消果し草葉の露の玉の輿哀れはかなき  
契りなり

○濱松のだん

思ふと儘ならぬこそ浮世とい、誰古への詫言、今ハ我身の上ふる涙の  
雨の晴間なく哀れや深雪の數々のうさ重りて目かいさへ泣瀆したる  
盲目の力と頼む物迫へわづか又細き竹の杖有又かひなき玉の緒の切  
も果ざる三味の糸露命をつなぐよすがみと背くわいかけゑほくと  
心の闇路たどりくる跡又大勢里童てん手又竹切振廻し、アレ朝顔の乞  
食目くら叩けく打よくと取廻す、コレ目の見へぬ者を其様みせ  
ぬ物じやひいなどれもくよいお子様や、今度よい物が有たら上ふる  
へ、いやじやひい乞食又誰が物貰ふもんで、ナ次郎坊、そふじやく

わたぎたない乞食の物貰ふ物かい、そんな事ぬかしたら、ヨリヤ斯<sup>から</sup>ガヤと惣  
トが竹で打やら石打やら育ても下主のわんぱく共よつてかゝつてさ  
いなまれ<sup>アレ</sup>、<sup>アレ</sup>再び云や玄ませぬ、こらへて下され誤つたと、土みひれ  
ふし詫けれど、泣て誤るなら堪忍してやろ<sup>サア</sup>皆<sup>セテ</sup>こい、いつもの土手で  
芝居<sup>ヒツヅ</sup>ごと、五郎よ次郎よと呼連て道草玄ながら走り行跡<sup>ヨハ</sup>深雪<sup>ハマ</sup>へわつ  
と泣<sup>ミ</sup>、淺ましや情なや、誰有<sup>ハナレ</sup>岸戸の家老秋月弓之助が娘共云られし身  
が、いか<sup>ハ</sup>落ぶれたれ<sup>ペ</sup>とて筋目<sup>スジメ</sup>もない里の子<sup>ム</sup>、乞食<sup>ヨ</sup>非人と打叩<sup>タマ</sup>か  
れ、誤りました<sup>ハ</sup>何事<sup>ト</sup>と身を抱<sup>ハシメ</sup>てどふと伏詫<sup>ハシカコトハシタ</sup>涙<sup>ハダ</sup>ぞ、いぢらしき、あら  
尊<sup>ハ</sup>と導き玉<sup>ハ</sup>へ觀音寺<sup>ハ</sup>遠き國<sup>ヨリ</sup>はる<sup>ト</sup>と乳人<sup>ハ</sup>淺香<sup>ハ</sup>淺からぬ歎き  
も身<sup>ハ</sup>ど笈<sup>ハシマ</sup>摺<sup>ハシマ</sup>の、深雪<sup>ハ</sup>の行衛尋んと思ひ立たる順禮<sup>モ</sup>辛苦憂身<sup>ハ</sup>のやつ  
れ笠<sup>ハシマ</sup>露<sup>ハシマ</sup>の舍<sup>ハシマ</sup>りも取兼て杖<sup>ハシマ</sup>を力<sup>ハシマ</sup>よ歩み寄<sup>ハシマ</sup>、<sup>アレ</sup>女中即時ながら<sup>モト</sup>お尋ね  
やたいと、音のふ聲<sup>ハ</sup>と顔<sup>ハ</sup>隠<sup>ハシマ</sup>し<sup>テ</sup>、<sup>アレ</sup>なた様<sup>ハ</sup>存じませぬが私<sup>ハ</sup>目<sup>ハ</sup>

界の見ぬ者ア、何ごとのお尋など、云物ごしのつまはづれどふやら尋る  
 其人ふ似たと思へど形かたち是ハ非人殊ム盲目心の迷ひと思ひ返し、  
 ボ、<sup>開</sup>わしと玄た事が鹿相な目界の見へぬお人ふ問ふ事いな物なれ  
 ド若し此街道を年の頃ハ十六七媚容人ふ勝れやしき育の大振袖供を  
 も連す只一人、通られし様子をべもし聞へなされぬかといふ正しく  
 我身の上と胸騒ぎしが待暫し世の中ふ似た聲の人似たとのなきふ有  
 すと思ひ返し、それハア笑止な事や往來も繁き此街道女中の一人旅  
 ハ幾人といふ限りなし、左様ふ尋なされてハ中よえれふ様もなし、  
 國ハいづく名ハ何とア升ヘサレバイン國ハ藝州福岡名ハ深雪様といふハ彌  
 乳母淺香ヤレなつかしやと云たさも落ぶれ果し今ハ身をわれと名乗る  
 も面伏殊ムそれぞと云ならば連れていなれて父母ふどの顔さげてまみ  
 ゆべき、罪深き事ながら僞りすかして歸さんと猶しも聲をくらまして

、成程慥かそんな噂も聞きたれど其女中の國を出てより様の憂目  
又逢漸のがれ此邊迄來られしがぞふしたとか四五日前又淵川へ身  
を投て死志やんしたと人の噂うわさだ令どの様よ尋てももふ、逢事おこります  
まいと聞て淺香あさかのア何其女中の身を投て、テはつと計くらみ身を打伏前  
後正體さしやうたい泣居たる、深雪も共々悲しさの涙かくして傍そば寄よ、コレア女中様悲  
しいアお道理ながら、老少不定の世の習ひ定りごとく諦あきらて早ふ國へお  
歸かへりなされ跡あと吊とざらふてお上なさるが佛の爲、海山かけし長の旅隨分怪我の  
ないやうと云つし立てかけ小屋い草屋へばぐりくして入相の鐘かねよ哀を添  
みける、跡あとと涙ながらの一人言こと、コレア聞きへませぬぞ  
へ深雪様、家出なされし其ときも一言明あして下さつたら仕様もよふも  
有ふ物もの、おいとしや奥様おくさま、お前のことを苦やに病あがで明あがても暮くわても泣く  
計果きご重おき病病ひの床ゆ死むる今端いまばかりの際迄まことにも、ぞふぞ尋たずねて連歸つれかへりせめて位牌いはい

よ無事な顔を合してくれよと私への遺言夫故忌の明をもまたす國よ  
 回る順禮もおまへよ逢ふ計じやよなせ死で下さんしたわしやお位  
 牌へ云譯を何とせふぞと身をもだへ恨る人の目のまへよ有共亥らぬ  
 くどき泣聞よ潔雪の身も世もあられず祖をかみしめ耳をおさへ泣聲  
 立じと喰しべりこらへくしくるしさ骨も碎る計よて泣よりも猶  
 つらかりし亂るし心押亥すめ淺香の涙の顔を上<sup>御</sup>我ながら愚痴のい  
 たりいつ迄いふてもかへらぬ事此上<sup>御</sup>菩提の爲打残りたる札所を廻  
 り早ふ國へ歸りませうそふじやくと立上り小屋の戸口よかけ寄て  
 ヤ女中様るかいお世話でござりましたモおさらばと夕月よ別れを  
 告て行過しが何か心よ點頭て木蔭よ忍び窺ふとも知ぬ目しいの悲し  
 さよ思ひず小家をまろび出乳母の行衛のそなたぞと見へぬながらよ  
 延上りヨレイ<sup>詞</sup>淺香今云ふたれ偽り尋る深雪のわしじやわいの聲を開た

其時の飛立やうみ有たれどもな淺ましいく此形でドウマ顔が合され  
ふとの云ながらわしが身をよくく大事と思へばこそ海山こへて憂  
苦勞廻り合ひ逢ながら胴欲みもよそくしふ云ていなした心の内うち  
どの様み有ふぞいの只何事も是迄の約束やくそくごとと諦あきらめて堪忍かんにんしてたも  
くや取分て悲しいは是程不孝ふこうな此わしをやつぱり子じやと思し召  
身の徒むかわを苦くみやんでお果はせなされた母様の死目しだめみ合ぬのみならず命めい  
日ひさへ露あしらずいかない事が、あろかいのふ思へばく淺ましや親  
この罪計みけいでも目が潰つぶれいで何とせふ、赦ゆるしてたべと計みて、こくく  
し涙なみだわつと叫びて身をなげ伏前後正體じやうたいなき沈おちむ、立聞たき香かも忍しのび兼  
わつと一聲泣出せば、扱あつひそこよと深雪が驚きこけつ傳つたびつ逃行とうぎやうを、縋すが  
り留とどて聲こゑふるひし、マレまく待まつて下さんせいのふ姿形すがたのかひつても一目ひとめ  
も見違まちがねども、名のりかけても中なかよ明さぬ氣き玄くろつと知た故よ餘所事よそごと

云なして、木蔭かげ又隠れて始終しとうの様子、立聞たてきたも盡せぬ縁えん去ながら此年  
月骨身はねみを碎き、漸尋やがてひだり逢た物心こころつよ強いさふいなそふとアそりや胴欲ともよくじやくア、  
聞へませぬアいなア、其恨うらみに断きりながら、今も今逆云通さかのちり身の徒徒で此様  
よ落ぶれ果た體からかたち、どふアそれと名乗られふ、わしが心の悲しさを、  
思ひやつてかんならず呵しかつてたるものな誤あやまつたと趙おり歎なげけア何のア  
呵しかりませう、たとへどのやふよお成なされても、廻り合まわたがわしや嬉うれし、  
い、どり云物の是はれ又、あんまりな落ぶれやう、日頃の辛苦しんぐが思ひやられ  
て、わしやくア此胸むねが裂さけるやうアござりますアいのふ、シタコお氣遣き遣なさ  
れますな、私が産うぶの親古部三郎兵衛と云人ひと小夜よの中山の邊へながらへ  
て居さんすとの事、肌身放はずぬ手て刀それを證據しおうごと廻り逢あわ、阿曾次郎様  
の有家を尋ねきつとお逢せあませよア何アをいふても爰あひの街道宿かど有方むかへ  
急がんと泣入深雪ゆきをいたりて、立上たつる折こそ有夜道よし道みちほかア輪拔吉わなぬけ

兵衛、よい事がなと蚤つみとり眼二人がそぶり物ぐさしと傍へ立寄提灯てやうとうの  
火影かげよ深雪が顔打眺め、まなぶわざやいつぞや摩耶の婆ばばよ百兩で直を極  
た娘、いつの間よ亂てかくれよなりをつたぞい玄くろかし醫者じやよかけた  
ら治らぬ事も有まい何分元手いらすの勝負物しゆぶつ拾ふてやろと手を取  
を淺香ひうか引退氣色ひきのけしきしょくをかへ、ヤ女と思ひ慮外仕りよぶとかわやると許しハせじと杖追  
取、仕込し刀拔ぬきかくる其手を押おへて、くわくこりややい輪拔吉兵衛といふ  
てな日本國を股またよかける人買商賣鰐じやうばいあわかきひねくり廻してもびく共す  
る男じやないハぼろその下つた亂れせふより賣れて絹のべしきいと  
てうける詞聞兼て、いは推參すいさんな勾引見かほりかみと賣なら賣て見やと拔放して切込  
刀さ志つたりと身をかりしもふ百ねんめと輪拔わいぱくも同じく旅差たびさし拔放し、  
觀念せよと切結きりきずふ深雪ふかねあせれど盲目もうめいの何と詮方せんかた並木原、二人ハ打合  
ふ月明り爰わざわざをせんどど「いどみあふ、いかゞいかづハ玄くろけんわな抜ぬきが石いしよ蹕つまづき

真逆様轉ふを得たりと起しも立ずかた背も分らぬつた切、さし物悪  
 者七轉八倒のた打廻つて死たる心地よくこそ見へよけり、淺香のし  
 つかと留めの刀サク嬉しや深雪様、惡者ハ玄とめましたといふ内より  
 も心のたるみ其儘そこハ倒ハセれ伏、深雪ハこいハさぐりより、いたる  
 手先ハ玄たふのりサクそなたハ手疵負やつたか、なふ悲しやと抱かし  
 へ、淺香いのふくと、聲を限りよ呼生れ、息吹かへし目をひらき、深  
 雪様お身ハ怪我ケガなかりしかくわしハ何ともせぬがそなたの手疵  
 が氣遣ひな、氣を體ハ持てたもと取付歎げべく、聲が高いわたしハほ  
 んのかすり手、氣遣ふとハござりませぬ、がもしものとが有た時の最前  
 やた古部三郎兵衛といふ人ハ此守りを證據シヤウジよ廻り合、今宵の譯をお咄  
 し有て何角のとをお願ハシマみあれ必ハシマお忘れ遊ハシマすキ誰も見ぬうちお出ハシマ  
 刀を納め深雪ハが背ハサウえ、おわすも涙ハシマふる三味のいつかむかしハシマよ、かへらふ

尾いともつる心をばてんじかへても手疵のいたみ、もうもくならぬ、我身さへ杖を力々立上り、女心も張つめし弓はり月の夜半のかね、つくす忠義の一筋道伴ひてこそ急ぎ行

### ○宿やのたん口

行雲の足並早き雲助が掠ぎ隙なき東海道傳馬人足歩荷物、吸付歩む煙草さへ、五十三次、打つとく中々賑ふ島田の宿、所名うての内證よし、名さへ戎や徳右衛門、仕似せも廣き十間間口、店の講札講印かけ渡したる暖簾も、風よひらめき吹付る繁昌類ひなかりける逗留客の萩の祐仙一間の内より歩み出、ごく女中衆ちよど尋たいとが有、外のことでもないが、奥の客人は中國大内家の用人人方であろう、シなれば萩の祐仙でござるちよどおめよかしりたいとやってくりやれ、よく呼まして上ませふと、お鍋は立て入みけり、斯と志らせよ岩代多喜太、一間より立出れば、國岩

代様先以ては堅勝けんしゆうで、誰かと思へば萩の祐仙久より對面身共なまめん逢たい  
 といいか成な。先達せんたつてのほ狀じょうよては新參しんさんの駒澤が諫言かんげんよて殿どのより  
 本心ほんじんよなられ運八殿うんぱちどんの最期さいごの由それよ則すこはな玄番げんばん様ようのほじょう狀じょうと渡せば受  
 取うけ一見ひとみし、太義おぎく身共なまめん迫おども何かなにか付つて邪魔じやまよ成駒澤せいこまつめ何なんぞ密ひそか  
 害がいせんと昨日きのよ海道かいどうよて芭久藏はくしやうざうといふ浪人ろうにんを連歸れんきり、委細いさむの密事ひそじや舍奥くわう  
 の間まの下したやへ忍しのべせ置おきたせそれよい手筈てはずもし其手そのてでいかぬ時とき下拙げづつ  
 が手製てせいの、ヨレ此この療藥りょうやくを薄茶うすぢゃよ交かわて飲のす時とき忽とち五体ごたい乞あびれて死人しじん  
 同前とうぜん刺殺さられすよ手間隙ひまきいらす、又此丸藥まるやくの則解藥げやくこれを先まへ呑のみ置おきば少すこし  
 も醉よざる大妙藥だいめうやく、カ時ときよやさぬとい聞きへませぬが首尾しゆびよふ參まつれば、ほほ  
 うびをくすつ乞ありと戴くわきとふ存まつじます、出でかすく、先まこれの當座とうざの  
 渡わたうびと差出しりゆつせば押戴おしわらき、ヨレば添そない何かなにか後程ごとう、万事まことにぬかりのない様  
 と云いつゝ立て岩代いわしろの元もとのざしきへ入いける、跡あとよ祐仙ゆうせん獨笑味ひとりわらひみいぞく

當座のほうびが先拾兩、さらば是から湯の玄かけと云つしあたり見廻して件の藥を湯の中へそつとほり込蓋びつ玄やり、斯して置て駒澤が戻り次第ふり立て、我等が先へ服加減解藥の丸子で玄しら玄ん、駒澤めの忽ちぐみやくくくと悦び勇む其所へ奥きいきせき下女お鍋ナク奥のお客がお呼なさる早うくとせり立る聲よ恵り祐仙のそしらぬ顔でをくへ入る始終親ひ德右衛門そろく出て跡打ながめ、最前から様子を聞バ何やら怪しいア藥駒澤様へナ上ふか、イイ夫でナ却て當り隙りどふぞよい思案が有そふな物じや、ソレ昨日松原で買って置た笑ひ藥アシ鉄瓶の湯をかへて、そうじやくと手早よ懷中の藥をふり込蓋を玄め、斯して置てまさかの時ハナトよしくと心で點き徳右衛門勝手へこそ入けり、かゝる折から立歸る駒澤治郎左衛門、足音ソット岩代多喜太祐仙伴ひ出迎ひ、ヨレバ駒澤氏嘸はれ先は是ヘニヤ何祐仙、

其方の平生茶好定て茶箱も用意玄つらんシ駒澤殿へ一服立て進せま  
 せいと云々祐仙空とぼけヨレバ岩代様私風情の鹿茶をお所望との冥加  
 ない殊よあなた様ハ是が則駒澤氏殿に歸國の先觸宿の欠引よて  
 只今に歸宿に遠慮深いお人され共元來茶の道よりは執心用意の薄茶  
 ャ所望だく、中々あなた様へ上升やうな茶でハムリませね  
 ドは所望との身の面目苦しからずば何服成と召上られ下されふと追  
 従たらしく立上り茶箱取出し毒薬の工みの裏流かゝれし共、玄らぬ手  
 前の玄かつべらしく振立て差出せば、岩代多喜太詞を改め、駒澤氏と  
 取次所へ、先々暫くと徳右衛門恐ながらと座敷へ出、憚ながら旦那様  
 いかいしいヤとながら數代お出入の殿様の、家來たるあなた方私方  
 で煎焚の物ハ此度又限らず吟味よ吟味を致した上指上ませねバ千々  
 一つ鹿相が山りました時の此徳右衛門めが越度泊り合したあなたの

お茶<sup>ハ</sup>如才<sup>の</sup>の有ふ様<sup>ハ</sup>なけれどもめつたよ<sup>ハナ</sup>と目顔<sup>で</sup>知せば岩代  
多喜太<sup>ア</sup>いらざるうぬが馬鹿<sup>ばか</sup>念身<sup>ねんじん</sup>が入魂<sup>じゅこん</sup>の萩<sup>萩</sup>の祐仙<sup>ゆせん</sup>茶<sup>ハ</sup>毒藥<sup>どくやく</sup>でも仕  
込<sup>ハ</sup>有<sup>カ</sup>と疑<sup>うなが</sup>ふて下<sup>ハ</sup>のか、ア、イ全<sup>まつた</sup>く左様<sup>で</sup>りござりませぬ<sup>ど</sup>、然<sup>ハ</sup>らバ羞<sup>恥</sup>  
留<sup>ハ</sup>た駒澤殿<sup>の</sup>の手前<sup>どいひ</sup>、今一言<sup>いつ</sup>て見<sup>よ</sup>真<sup>ま</sup>二つ<sup>よ</sup>打放<sup>うちはな</sup>すと、きつぱ  
廻<sup>ハ</sup>せば祐仙<sup>ゆせん</sup>押留<sup>おとどめ</sup>、ア、キ先<sup>よ</sup>お待<sup>ま</sup>なされませ<sup>エ</sup>、貴公様<sup>の</sup>立腹<sup>りつぱく</sup>尤<sup>尤</sup>な  
れど、徳右衛門<sup>の</sup>ナ所<sup>も</sup>又一理有<sup>ハ</sup>、斯致<sup>そ</sup>下拙<sup>げわざ</sup>が毒見仕<sup>は</sup>り、其上<sup>よ</sup>て駒  
澤様<sup>へ</sup>ばし上<sup>ませ</sup>ふ、何<sup>ど</sup>徳右衛門<sup>それで</sup>云分<sup>は</sup>は有まいがヤ、イセ<sup>は</sup>自分<sup>じぶん</sup>  
又お毒見<sup>ハシミ</sup>なされる程<sup>ハシミ</sup>慥<sup>ハシミ</sup>なと<sup>ハシミ</sup>ムリませぬ<sup>チ</sup>、そふ有ふ<sup>ハシミ</sup>、其替<sup>ハシミ</sup>り何事<sup>ハシミ</sup>  
もない時<sup>ハシミ</sup>此祐仙<sup>が</sup>了簡<sup>りょうかん</sup>せぬが合點<sup>か</sup>、ヤ、夫<sup>ハ</sup>せひ<sup>ハ</sup>及びませぬ<sup>ハシミ</sup>存  
分<sup>ハシミ</sup>成升<sup>ハシミ</sup>ふ<sup>ク</sup>、面白い<sup>ハシミ</sup>、きつと詞<sup>ハシミ</sup>をつがふたぞよ、ドレ毒味<sup>ハシミ</sup>を致<sup>ハシミ</sup>そふと、  
茶碗<sup>ちわん</sup>取寄<sup>ハシミ</sup>そこらをきよろ<sup>ハシミ</sup>見る振<sup>ハシミ</sup>よて解藥<sup>ハシミ</sup>の丸子<sup>ハシミ</sup>そふと呑<sup>ハシミ</sup>さあら  
ぬ顔<sup>ハシミ</sup>して件<sup>ハシミ</sup>の薄茶<sup>ハシミ</sup>栗<sup>ハシミ</sup>も殘<sup>ハシミ</sup>さず呑盡<sup>ハシミ</sup>し、ヲ、ハ、徳右衛門<sup>ちよつと出<sup>ハシミ</sup>や<sup>ハシミ</sup>見</sup>

たか此通りじや徳右衛門是でも別條が有かどうぢやと、己が工みの薬  
とは取替有とは夢よもぢらす。徳右衛門ヤ戎や徳右衛門、名び徳約束じ  
や夫へ置れく、誤り入ました。眞平は免下さりませ、何じ  
や、免下されいも氣が強わい、おかしないぞ。徳右衛門了簡ならぬぞ、己ア是なり。濟そふ、あまりのとで腹  
がよれる、一体こそや何のとぞや、何じや志らぬがむせ  
うふおかしく成ってきたわ。岩代見かねて、祐仙、おかしく  
もないと笑ひすと早く駒澤殿へ差し上ぬか、成程、只今  
差上升ひ、暫くお待下され、テめんよふな、笑ふまいと思  
ふ程猶、コヤたまらん臍セがさける、コヤくたわけ者め何が其やうよ  
おかしい、身共ハ格別駒澤殿へ無禮で有ふぞ、左様よお腹ハ立ら  
れな下拙サカも笑いたいとのないけれど、何が腹の底から涌出るやう

よ、は、是でハ徳右衛門へ押がきかん、ハ、ア苦しい堪忍してくれ誤つたく、ハ、ヨイ心を取直しモツ笑ひんど、おれも男じや笑んといふたら笑ひんおれを誰じやと思ふ萩の祐仙様じや、何の其何じやいふてはいるハシシナ玄やないく、ハ、ヨイ徳右衛門中直りせふ程又、ハ、其替り醫者を呼んでハ、ヨイ醫者ガ醫者を頼むハ、卑怯なれど、是ハおれが手療治でハ、いかんわい、ハ、ヨイ何でも笑癪といふ物か玄らん、ハ、ヨイ徳右衛門もふ何よも云ぬ誤つたく、ハ、ヨイ早ふ醫者を呼でくれ腹が立程おかしいハ、ヨイ忌うしいひ、ハ、ヨイ肺の臟も腎の臟も腹の中で宿替するやうな、ハ、ヨイ宿替待てくれ付物の應對もせよやならん、ハ、ヨイ五臓六腑が、チヨイちよい踊始めたとすり替た藥故とハいざしらず、果ハ茶箱も蹴ちらして笑ひ入こそ正体なき姿ニ鞠れ岩代多喜太ばかり戎や徳右衛門、おかしさ隠す計也、短氣の岩代ぐつとせき上ナ大馬鹿者の萩の祐

仙笑ひ止ハシメ手ハタハタ見せぬと、力身かへれハラハラ悔りしながら手を合しても  
 止らぬ笑ひ、ハハハめつそふあく、ハハハはチホ、丁チホ、簡ハハハと説る詞も  
 あやちなく笑ひ薬の利目ハラハラとしらぬ祐仙息はづませ轉ハラハラ笑ひつ、ハハハ  
 遂て行案ハラハラ相違の岩代ハラハラ、鞠ハラハラ果たる佛頂頬ハラハラ、様ハラハラの馬鹿者ハラハラかしり  
 湯に入を忘れた、亭主めうぬよく邪魔ハラハラをさきりく風呂ハラハラへ案内ひろ  
 げと、それ共得云すむしやくしや腹ハラハラ席ハラハラ蹴立ハラハラ廊下口跡ハラハラ心を奥の間  
 の、我座敷ハラハラへと、駒澤も座を立てこそ入ハラハラみける

## ○宿やのだん

何國ハラハラよも暫ハラハラしハラハラ旅ハラハラとつやりけん、昔の人の筆の跡ハラハラとハラハラ詫ハラハラる假の宿ハラハラ  
 夜の襖ハラハラのすきもりて風ハラハラ、またハラハラ燈火ハラハラのかげも淋ハラハラしき奥の間へ、立歸  
 る次郎左衛門、何必なく座ハラハラをしめて、ふつと目ハラハラと付衝立ハラハラの、張ハラハラませの歌讀ハラハラ  
 下し、ナ心得ぬ此張ハラハラませある地紙ハラハラの歌ハラハラ、先年山城の宇治みて秋月が

娘深雪が扇おうぎ又某それがしが、又逢迄の筐かたと書て與へし朝顔あさおほの歌、其後計らす明石あけだるよて、船ふねがよりせし其砌琴そきことと合して深雪がふし付、折ふし思之おもひの互の出船、あかぬ別れを悲しみて女の手づから我船へ投込なげこし。此扇、然るゆ今又此家よて思おもひずも此はり交まわア何なん者が調はんひ傳つたへて、計らす東の驛路えきじゆと見るもふしきと、獨言ひとりごと其折からの忍しのばれて詠よみめ入たる時ときしも有襖押明德右衛門小腰こしやうかゞめて入來れば、こなたも扇押隠おひくひそし、亭主先刻さきときに扱あつつきつい衝はじき危あやき難のがれを遣おとしも全くそちが志おも、是これへく、ごめうが冥加めいが餘あまる語詞ごじ、最前こなたへ參る砌そき何か三人ひそく咄どし、合點行あてすと忍しのび聞きべゑびれ藥やくを茶ちゃと交まわてあなた様ごりやさまへ差上さあんとのアゴリヤサア恐おそろしい工くわみこ、憎にくさも憎にくし、直ぐみや上あふと存あじたれどそれでハどの様どうがな科人くわんが出來あふも知しぬと存あじ、幸こう先日きのう慰なぐさみ求めました笑わらひ藥やく幸こうとゑびれ藥やくと取とかへたを、知しずみ呑のださつきの時宜とき是後のち迎むかも旦の那様ながさま、ゆだん油あぶら斷きり成なませぬぞへま、其

義の某もとく承知致した。それの格別此衝立み有朝顔の唱歌の何人の  
 手跡どふいふとからお身が手よ入しそ、それでござり升か其歌又付  
 てゝ哀れな咄し。元は中國邊歴の娘そふなが何やら尋る人が有達、  
 親元を家出しそれより方よと流勞して果ひどふく目を泣瀆し跡の  
 月迄ハ濱松邊ニ其歌を諷ふて袖乞所ニ又國元から所縁の女子が尋て  
 きて逢ました。其女子も程なふ病死夫から又ひとりぼし此邊迄其歌  
 を諷ふて歩きましたが何が盲目でこそあれ器量はよし聲はよし見る  
 程の者がいぢらしがり、朝顔くといふて其歌を知ぬ者へござりませ  
 ん、私も餘の不便さ、此宿又足を留させ、今でハ宿やくのお客の伽何  
 も不仕合せな者も有物でござりますと涙片手の物語りも心よひし  
 ノ、こたゆる駒澤もし云かれし我妻かと轟く胸を押えづめ、夫は  
 捕哀れな咄し、身も今宵ハ何ぞやら物淋しいうつぶんの爲其女を呼寄

る事ハ成まいか。何が扱お安いと只今呼遣よびつかせします。お慰み又琴か三昧  
ハ何分よき又頼み入と云々子細の有ぞ共立らぬ佛氣德右衛門尻はりがる  
えこそ立て行跡へ相役岩代多喜太のさくと座すわり直り、ヤ駒澤氏應よせうは  
退屈しりくでござらふ。岩代氏殊の外お早いとでござる。うれべに解て  
もとけやらぬ前垂まへだれがけの下女お鍋次の間まと手をつかへゆ。只今朝顔  
どのが見へました。是へ通しましよかいな。朝顔あさぎどハ何者。此道中で  
琴三昧ことみを彈ひき旅の徒然とぜんを慰なぐさむる瞽女くじめとやら拙者さうしゃも何か物淋さびしうござ  
れ。佩つちと琴でも聞ふと存じ、亭主を頼呼寄たのむましてござる。そりや止と  
なされい。又なせな。先刻身共ちからが知音ちおんたる萩の祐仙ゆうせん同席どうせきいかゞ  
いられた貴殿ごでん乞食こじきをばさしきへ通されまい。高たかのしたれた目く  
ら女めのまんざら怪あやしい茶箱ぢばも持參致よさんぢすまいと、志つへいがへしよぎつ  
ぐりと言句ことく又詰づれどへらず口くち左程ほど所望ならば、免かも角くわも併あわざしきへ

ハ叶ハぬ庭へ呼出し琴など三味など彈し召れて早く此場をぼつ歸されよと飽迄意地持つねじけ者寄ず障ず駒澤が差圖ふ鍋が心得て朝顔どの召まする朝顔どのくと呼立るむざんなるかな秋月の娘深雪ハ身よつもる歎きの數の重りて瞬失ふ目なし鳥杖柱共頼てし浅香ハもうく朝露と消残りたる身一つを道も捨も様先の飛石探る足元も危き木曾の丸木橋渡り苦しき風情みて漸座して手をつかへ召ましたれ此おざしきでムリ升か拙い玄らべもお笑ひ草おはもじさまやと會釋する顔も深雪が馴の果不便の者やとせぐりくる涙呑込扣へ居る岩代はそれ共しらずヤア見ぐるしい其ざまで我よが目通りへうせたは聞及んだ朝顔めなヨキリく立てうせおらふ、アヤ岩代氏そふもぎどうと仰られな此方よ呼寄せらればこそ思ひがけのふ、アヤ思ひがけのふ來た物を呵るハ武士の情よ有すヨリヤく女太儀ながら其朝顔とやらの歌、サ、早く

調ふてきかせいと望む心の千万無量知ぬ岩代つらふくらし、扱あつト駒澤  
氏うじよりきついほ執心じしん、ヨリヤく目くら、何成共ごう、諷ひたへくさ、早くはやく、はやく諷ひた  
まするでござり升のぼと、こがるこがる夫おとこの有あぞ共とも、知しぬ目くらの探さり手て、懸ゆ  
へ垂たれ、誰かだれ憂うきを斗と爲な吟ぎんの糸いとより細ほそき指先ゆびさき、さす爪つめさへも八つ  
橋はしのやつれ果たまたる身みをかこち、涙なみだよ曇くもる爪つめ玄くつろらべ、露つゆのひぬまの朝顔あさぎやを  
てらす日ひかけのつれなきなき、哀れ一ひとむら雨あめのはらくはらくと、ふれかし、ム、夫おとこ  
を慕まつふ音律おんりつの我わたくしが、身みよ思ひやられて思おもひずもかんるい致いたした、の  
ふ岩代殿いわきだいか様よう、琴ことといひ器量きりやうと云い、イヤモ中なかかんしん仕つかる、イナニ朝顔あさぎやとや  
らそこの定めてひへるで有あふ、身共みともが傍そばで今一曲うたサさく所望しょぼうだくだ、アイヤ岩代殿いわきだ  
もふ歎ゆるしておやりなされ、去迎よむか駒澤氏こまざわうじ身共みともが望ねがむを留とどさつ玄くつろ  
やるひ意地おちの悪いわるとや物ものキそふではござらねど絞からも定たまて勞なぐませ  
ふと存あつては、然らば曲うたは止とよして、ヨリヤく女めのそちも腹はらからの非人ひじんでも有あま

い身の上咄しも又一興咄して聞せ、ぞふだく よふ問て下さり  
 ます、お詞みあまへお咄しやすも恥しながら元私へ中國生れ、様子有て  
 上方住居過し卯月の中空み都の辰巳宇治の船こがれよるべの蟹狩み  
 思ひ初たる戀人と語らふ間さへ夏の夜の短い契りのほいない別れ所  
 尋る便さへ思ふみ任せぬ國の迎ひ親よみいざなはれ難波の浦を船出  
 して身を盡したる憂思ひ泣て明石の風待み、たまく逢は逢ながら、つ  
 れなき嵐み吹分られ、國へ歸れペ父母の思ひも寄ぬ夫定め、立る操を破  
 らじとやしきを拔て數々の憂目を乞のぎ都路へ登つて聞ペ其人へ東  
 の旅と聞悲しさ、又も都を迷ひ出いつかは廻り逢坂の關路を跡み近江  
 路やみの尾張さへ定めなき戀しく、目を泣瀆し物のあいろも水と  
 りの陸みさまよふ悲しさり、いつの世いか成報ひよて重ねぐの歎き  
 の數憐み玉へと計みて聲を忍びて歎きける、ハテ、扱哀れな咄し併男日照

もない世界よ、氣のせまい女だな、ヤもふ志ゆんだ咄しで氣かめいつた、寐酒ねぎけいでもたべ氣を晴そふ、イヤナニ女暇ひまをくれる立歸れ、ハイアリガタ有難ふムリます、左様なればお客様きゃくじやうもふお暇ひまナマスチ、朝顔あさがほとやら太儀おおぎで有た切て聞た身の上咄し、若其夫わくめのが聞ならば嚙満足ささ満ぞくみ思おもで有アリ岩代殿いわしろどの、左様アリ是アリに深切しんせつなふ詞ことば、有難アリガタふ存のこじますと、杖つえ探さり取ながら、むしが志らすか何ナニとやら耳みみよ残のこりし情じょうの詞ことば名殘惜じゆきさよ泣なぐきとも、心こころハ跡あとよ探さり行折ゆくしもをくク若侍わかし、最早餘程深更しんからよ及びし、兩所共ふたところよ早はやお休み、いか様明ようめい日ひハ正七つの出立で立ち、駒澤氏こまざわお休みなされぬか、ヤ拙者かづしやハ今暫しばし用事うようもられ、お構かまひなく先まへお先まへへ、ふせらふふせらふに免下めんげされふと、立上たのりしが胸むねよ一物心こころを跡あとよ奥おくの間まへ伴ともれてぞ入いみける、行間遲ゆきしと駒澤こまざわの手てを打ならし女めのを呼コリヤく、德右衛門とくざゑもんよ急たまよ對面たいめん志したし、呼くでくくやれと、云付いふつけやり旅硯たびすの墨摺すみすり流ながし、以前まへの扇押おひら開ひらいて、何か書付用意いふつけよういの金子藥くわらの包いとうみ取と認めため

る目の先へ疊を貫く白刃の切先氣轉の駒澤有合ぬるみ刀よそしげば  
 血沙と心得してやつたりと様の下、壁踏やぶり顯れ出る芭久藏曲者や  
 らぬと治郎左衛門投打茶碗の取つぶしかちろぎながら不敵の久藏覺  
 期ひろげと切付る刃を恐れぬ扇のあしらひ廊下づたひ來かしる亭  
 主ヨハ何事と覗ふ内難なく刀打落し取成切なりとたんの折子首にはる  
 かよ飛ちつたり思へず志らず徳右衛門ヤレ適に手の内シタサコヤツ  
 ざり升ホウ某を欺し討みせんと飛で火よ入夏の虫、死がいによきよ  
 賴み入バアお氣遣ひなされますなガ只今召ましたハ何のお用でござりま  
 す、徳右衛門折入て賴み度ハ先刻の朝顔と云女今一應呼寄てたもる  
 まいから、畏りましてハござり升が彼の直ヌ清水とナ方へ参りました、  
 お用事ならば呼み遣へし升ふがま、どふで今夜ハお間ヨヒミ、ナ殘念  
 至極身ハ正七つの出立、よくく縁の、何ぞに意なされます、ナヤナニ徳

右衛門今之女じよ謝禮じやれいの爲此三品を其方そがた玄くろつかりと預置間朝顔あさがくあひだが参  
らべ渡してくゞやれ、ハイハヤ、コヤコヤおびたゝしいお金其上結搆けつこうな女子扇せうせんお  
藥迄まで其藥そのくわ大明國だいめいこく秘法ひはふの目藥まのへね甲子かのへねの年とし出生しゆつせうせし男子せんじやうの生血せいけつを  
取て服すればいか成眼病がんびやうも即座そくざ又平癒へいゆ、朝顔あさがくも渡してくゞやれ、コレ何  
から何迄なぜ心こころをこめられた下おろされた物參り次第相渡よおこし悦えばしま玄くろよど受  
取折とりそりしも時計どけいの七つしちアリアリもふ七つの刻限こげんとかぞふる内うち岩代多喜太  
裝束しうぞく改かめ旅出たびで立たち同勢どうせい引連立出ひづれだいしゆつて、イサ駒澤氏こまざわ出立仕しふかと勸すすめる詞こと治郎  
右衛門衣服うぶ縫ぬいひ立出だいしゆつれば見送みおる亭主ていしゆが暇乞ひときさひ心こころそぐひぬ駒澤岩代こまざわ打連  
てこそ出て行跡きよ見送みおつて徳右衛門とく同じ侍しでも黑白こくはくの違いひ意い地ぢくね  
悪あくひ岩代いわさ引ひかへ情深じょうしんい駒澤殿こまざわア道みちの侍玄くろやななそれそふと朝顔あさがく  
今夜こんやの禮れいそぐひぬ下おろされ物もの、何なんぞ様子ようしよの有あそな事ことと思案おもんの折せつ  
ら深雪ふかゆき何なんか氣きかしり、座敷ざしき玄くろもふてうどくと又立歸きる切戸きりどの内うち

徳右衛門 目早めはや見て、朝顏あさぎか遲おそかつた宵よのお客き様さまが最さい一度よ呼よやつ  
てくれれいとおつ立たやつたれど、清水きよみずへ往むかたと聞きた故ゆゑお断ことぶきやたれば今いま  
先まへお立たなされた併そなへ悦うれびや大おほまいお金かなと扇せん又また結むす構こうな目藥めのう迄までわがみよ  
やつてくれれいとお預あずなされたへいの、是これ冥加めいが餘あまると、お禮ごれいやさいで  
殘のこり多おほい、カヤマ旦の那な様さま此この扇せん何なんぞ書かてひざりませぬか、ちよつと見み  
て下さりませぬ、金かな地ぢ又また一輪ひとつ朝あさ顔あさぎ露あさぎのひぬぬままが書かて有あ、裏うら又また宮城みやぎ阿お曾そ次じ郎ろう事こと駒澤こまつ次じ郎ろう左さ衛え門もんと書かて有あ、エアノ宮城みやぎ阿お曾そ次じ郎ろう事こと駒澤こまつ次じ郎ろう  
左さ衛え門もんと其その扇せんようはつと計けいふ俄にわかの仰あお天てん、ミ志しらなんだくくわい  
な道理ぢでよふ似そた聲こゑと思おもふたがそんならやつぱり阿お曾そ次じ郎ろう様さまで有あた  
か、ガよう旦の那な様さま其そのお客き様さまいつお立たなされたへ、今いまの先まへのとじやガわが  
みみが又またおなじみか、、なじみ所ところか年月とき尋たずる夫めでござんすいな、斯この云い内うち  
も心こころがせく、追お付つてたつた一ひと言ことと行ゆんとするを引ひ留め、アレアレア待まやく。

折惡ふ雨も降出し此くらいよ一人のあぶないく、  
とひへせぬ、さゝ、それへそふでも目くらの身であぶないく、  
くと突退劍退杖を力よ降雨も、いつかないどりぬ女の念力跡を志た  
ふて追て行名よ高き街道一の大井川、玄のを亂して降雨よ打交たるは  
たしかみ漲り落る水音ハ物凄くも又、すさまじく、夫を玄たふ念力よ道  
の難所も見へぬ目も、いどりぬ深雪がこけつ轉び漸爰よ川の傍川  
越達駒澤次郎左衛門様と云ふ侍、もふ川をふ越なされたかまだか聞し  
てくといふ聲さへも、息切の聲よ川越口より、其侍ハ今の先渡つた、  
俄の大水で川が留つた、笑止くと計にて皆ちりりよ行過る、  
起直つて見へぬ目よ空をよらんで天道様、聞へませぬくくわいな  
此とし月の艱難辛苦も、どふぞ最一度其人よ逢してたべと片時も祈ら

ぬ間違もない物をけふ又限つて此大雨川留どりく、何とぞいの思  
 へば此身の先の世でいか成とを罪せしぞ扱もく、あぢきなきこがれ  
 くた其人よ逢ても玄らぬ盲目の、此身のいか成悪業ぞや夫の跡を戀  
 玄たひ石よ成たる松浦漏ひれふる山の悲しみも、身よくらぶれてハ數  
 ならず三千世界を尋てもこんな因果が又と世よ有べきかゝとくどき  
 立拳をよぎり身をふるハシ泣涕こがれ歎きしハ餘所の見る目も哀れ  
 なりやし有て起直り開、そふじやく、逆も添れぬ身の業因此川水の増  
 りしれ所詮死との事成べし未來で添を樂しみ、爰を三途の岸と定め、  
 弘誓の船よ法の道急がん物と泣くも夫を戀し小石の數袖や袂よ拾ひ  
 こみ、なみあみだ佛の聲諸共既よ飛んと其所へヤレお待なされ深雪様と  
 聲よ恂りけしとむ内欠來る關助徳右衛門、あひてし儘のかちはだし、斯  
 と見る々抱留、マアくお待なされませく誰かひ玄らねど放してく、く

侍しやれ朝顔殿、わしもこなさんの身が氣遣ひさよ走つて來た、コレ  
助殿とやらが見へたぞや、下郎めでごわりますと、無理と手を取抱退  
られべ、ふいふ聲の關助か、ア、遅かつた／＼わいの此年月の艱  
難して尋がれた阿曾次郎様と折角逢たと目くらの悲しさ、それ共し  
らず別れたれど、ふやらお聲が氣がしり戻つて聞ペやつぱり其人、己  
やれ追付ふと跡追ふて來たれば此川留、とふせふぞいのふ／＼、  
チ、お道理だ／＼、拙者めもあなた様の行衛を尋廻る内、一昨日の夜  
の夢よ、淺香殿よ逢則あなた様の島田の宿戒や徳右衛門方よござると  
云えやると思へば目が覺、シ何でもふしぎと夜を日よ繼で參つたかひ  
有てすつとのとよ危ない所を、ヤレ嬉しや下郎めがお目よかしる上に  
お氣遣ひなされますな、駒澤様よ添せナ併淺香殿の坂東巡禮と成て東  
海道へ尋て見へる筈、ガ逢なされしかな、サヘバイン其淺香よ跡の月濱松で

廻り逢たが其夜悪者と出合數か所の手疵死る今端よりを呼中山の邊より私か産の親古部三郎兵衛と云人あり此守り刀を證據より尋行秋月弓之助が娘と名のつて逢とおしへ可愛やついと死みやつたといのスリヤ淺香殿より最期とや、ボイはつと計驚く内始終聞いる徳右衛門、そんならおまへ秋月弓之助様の息女様又淺香と云い我娘で有たか、ア私とい其尋なざるし古部三郎兵衛とナ者則あなた様の祖父秋月兵部様より三代相恩若氣の誤り奥女中と忍び合、お手討み成所を弓之助様より助られ女諸共國を立退産落せしが女子の子貧苦の中より育る内二つの年より母の病死、男の手で育もならず伯母が方へ此短刀を添て養子よりしが廻りくして思ひすも親が命を助られし秋月様へ奉公死でも忠義を忘れず導かつたか、出かしおつたな此上へ深雪様へ三郎兵衛がお土産と件の短刀抜放し腹より突立れば、關助驚き押留ミ

何でこなたへ此最期死でお役立とか譯を聞して下されど、いへばく  
るしき聲を上、歎かれなかたゞ。最前駒澤様の物語唐士傳來の目藥  
甲子の年の男子の生血みて服する時、いか成眼病も卽座に平癒との  
、某甲子の生れ成べ我血沙をもつて件の藥を調合し、早よあなたへお  
進めなされ早く、實もと關助用意の水呑取出し手負の血沙受留く、  
泣入深雪が懷の妙藥取出し差寄れば深雪受取我夫の情よ餘る賜もの  
と、押戴きく、只一口のみ呑干べ、ふしきや忽兩眼開きありの這ふ迄見へ  
すく又ぞ深雪が嬉しさ人とも悦び合ぞ道理也、嬉しや、最早此世よ望  
なしいづれもさらばと刀引廻し、笛のくさりを刎切て名のみ流るゝ大  
井川水のあひとぞ成みけり、跡や枕よ取縋りわつと計み泣深雪露のひ  
ぬ間の顔朝も開きし此目へ盲鼈の浮木うどんげの花よ増りし夫の賜  
二つより我故此世よ亡人かと取付歎くを關助が勇よ亡骸手昇の興早

明渡る鳥の聲、山田の惠彌増り重れる朝顏物語末の、世迄もいぢぢるも

○歸り咲吾妻の路草

咲た櫻、又なせ駒つなぐ、駒がいさめペ花がちるく、其駒澤を、戀忘たふ。  
櫻又あらで朝顔が、姿も昔又かへり咲髪かみも鳴田と立か弓引も契らぬ海  
道又誰も人目を大井川跡又見付や濱松の、憂艱難又引かへて昔語とあ  
らひかへ白すかかけて二川や、かい亥よら亥げみちよこくくとあ  
ゆみし、姿も吉田御油赤坂宿を打過て藤川繩手又休らひけり調ほんま  
わしとしたとが夫又逢ふが嬉しさに供も構はずうかくと先へ歩む  
と思ひしが此關助アリヤサ何してぞ、いくと打招まねけべ、跡又おくれて關助が双  
紙の館をふりかたげアリヤサヨイヤサとつかけべい先のけろ、おなべがかいもち  
ねれたらもてこい合點亥や、夕べも三百はりこんだ亥てこいな、とつこ  
いふれくふりこんだ戀し殿アリヤサあれでもないかカク

似ぬこそ道理違たゞちがひぬものゝ眞女と忠義、追付廻り岡崎や頼  
く鳴海と關助が、縁儀祝ひし言の葉又深雪嬉しく、ヲ、關助か遅かりし、そ  
なたを跡みふり捨て歩むも女のがんまちと、嚙や心みおかしから、面目  
ないと詫言わびこと謂、何が扱く、拙者めもあなた様のハ供す、駒澤様とハ祝言  
有やうよ此跡の宿の氏神ヒノミツ、縁結えんげきびと聞し故、心願じんがんこめて、それへ嬉し  
い去ながら、そなたも兼て知る通り、夫おとこ又添そなへれぬ因果いんがいの縁死えんしきる所を助  
りて、一度東の我夫おとこ又逢まつへばとふしてこふしてと、心こころちりめもつれ合  
志めて、からんだ松のまつ葛くず其みどり子こどもを、うみ落おちし、ねんくろろんや、ね  
んねがもりもどこへいたいた、どこどか忘わすれた其人ひと又、逢まつて恨うらみをなんとま  
ああ、とふ云いてよかうやらなんと庄いさぎのハ憂思うきおも謂、ヲ、お道理おとづれく、あなた様よ  
り關助が、三さん九度くじゅうふはござれども、追付婚儀おとづれの取結とりつけび、其時そのときひけめひけめには  
れ奉公まつこう、ぶり込こくハ祝儀しゆぎの、中なか見事みせ花の館、駒こまの手綱てつなをひかへ綱つな揃そろ

へやり持花の鎌並松の音もゆたかよ、サシヤシ、玄やんと納めた、ハ、勇  
笑ふて行先へ伊勢路と伊賀の國境榮へ築ふる坂の下里の童が聲々  
よ、朝顔のあしたよ咲て夕よ、露の命も懸故ならば、わた玄や厭ひぬい  
どやせぬ、ソレそふじやいな、朝顔の名よこそ立れ幾秋もほんの  
心も色ゆへならば、わた玄やいといどやせぬ、ソレそふ玄やいな  
く諷ふ聲く身の上よ、ひとつと思ひ石部川、花香もこもる梅の木を  
たどりて急く道の邊よ咲亂れたる朝顔よ、むれ飛ぶ蝶のふも玄ろく、う  
かれくして主従が浪花路さ玄て急ぎ行

## ○駒澤上屋鋪の段

浮る雲よ譬たる不義の富貴よ引かへて月日を揃ふ村雲も今時を得て  
晴渡り新よ造る普請の結構玉を欺く駒澤が直成心の上やしき殊よ今  
日は殿のお入とさしめいて必はした取よ、掃除しもふて寄ござり、詞

菊野けふ殿様のお入とて此やうな結構なほざしきをそうちしてきれ  
いなと云やないかいのふ、其きれいな次手よ、爰の旦那次郎左衛門様  
此廣い大坂中よも最一人となり器量よしあんな殿様を夫よ持奥様よ  
成る人の仕合せ物じやないかいのど、ちよつと寄ても男の噴口かしま  
しきへ端女はしの習とこそ見へよけり、程なく殿様の入と下部が走らせ  
よ姫共こじまとソリヤヨソお成あしや旦那様よ、や上ふと打連うちづれて皆ま奥へ入よけり、大内  
之助義興わきへさいつ比ひ々東國よて、大友の殘黨ざんとうを誅伐ちうばつし、本國へ歸館有路  
次の岸つよ駒澤が、上うやしきへぞお成有あ、お供ともよ岩代多喜太かたたけ肩臂ひじいから  
し入いり来る、主駒澤次郎左衛門さぶらへり下さり頭あたをさげ、殿とのよ益ますに機嫌きわんよくほ  
座遊くわうされ愚臣ぐしんが弊居ひいきへお成あし冥加めいが至極有難き仕合むねあわせと手てをつけば、此  
程大友の殘黨ざんとう等近國ちかくによ徘徊致はいはいかよし軍慮ぐんりよをめぐらし只せん一戰せんよ責討せんとうんと  
評議ひやうぎまちく、汝なも其旨そのしゆ相心得あいだつ一乘いちゆうよ勝利しょうりを得とる術て有あやいかよくと

有けれど、岩代の玄やくくり出其軍あぶないく大友の殘黨迎あなどりがたし、今諸國へ討渡たる殘黨共スハ合戦と聞ならば蟻の如くアリ集  
り蜂の如くよ起なべゆしき大事ならん。其時より味方味方の小勢少勢譬ハシメべ鶴  
卵ハチをもつて磐石磐石を打様なものそんなあぶないとせふより又大儀おほ儀へ行  
て傾城買せんかいが増ますで有ふと己が悪事を忘らばけよ、大友一味の好曲かんきよを夫それと  
駒澤心こまざわ心こころよなづき、軍軍のとの跡跡での評議先今日いにしへ鬱散うきさんを晴さん爲奥  
の亭亭みて鹿茶そちや一服獻けんじやう上いたし奉りたし、いざく入下さるべしと、や  
上れば義興公ぎこう立たつて入給いれふ、早日も西にしよ傾かたむきて黃昏はうがれ近き秋の空心  
もいきせき關助かわすけが忠義ちゆうぎ一圖いつずよ深雪ふかゆきをば伴ふ心のいそくと漸爰つづきよ着  
みけり、關助かわすけの小腰こごしをかゝめくわめば免下めぬけ下さりませふ、私事わたくしの藝州岸戸げいしゅうの家  
老秋月弓之介じゆげが家來いえしら關助かわすけとナ奴めやつめでござり升のぼ、殿方殿方よば取次とりつけ下されま  
せふと、云聲漏もれて治郎左衛門、一間の内より立出る、見るよ深雪ふかゆきの飛立嬉

しなのふなつかしや我夫と抱つきたさ今更よ邊りを見やりもぢく  
と赤らむ顔の色も香も盡せぬ奇縁ぞわりなけれ治郎左衛門打解て、イヤ  
其方が聞及し關助とやらか長くの介抱何角の世話、過分なるぞ  
よ、イヤ深雪日外島田の宿みてふしきと廻り逢たれど、大切なる殿のふ  
供先同家中の手前と云わざと其場へしらぬ躰、シテ其砌德右衛門を頼み  
そなたよあたへし薬みて眼病も平癒せしかど、云べ深雪へ今更よ過越  
かたの憂艱難思ひ出していらへ涙先立計也、關助の引取て、イヤそれ又付  
てもお咄し申上れば長くしいと仰の通り少しも違はず御病氣本腹  
其場所へ参り合せ直様是迄御供す、駒澤様の御きげんの躰を拜しまし  
て下郎めの安堵深雪様より懸くお嬉しうござりませうと互ひよ顔  
を見合せて、悦び合こそ道理也、始終を聞いて治郎左衛門、オウ是迄かんなん  
心苦して廻り逢たもつきせぬ縁し幸今日の殿のお成なれば委細の譯

を言上ことじやうしゆるし有た其上ともじやうの友白髮しらが迄添遂とよそん、か何角なにかくの咄とつし身みが居間ゐまで關助共ともに先あがれど、詞ことニ二人ふたりが飛立計とよりき、春待はるまちかねし鷺さぎが梅うめ又初音はつねの心地こころぢして悦えび入いんとする所ところへ、開マテ汝等まなざし大内おおうち之助義興よしひで、得とより是これよて承うけ知しせりと悠然ゆうぜんとして立出給だきひ駒澤こまつざわ又打向うむかうひ、開イヤ夫成深雪おとこなまゆきとやらんらん、岸戸きしの家來秋月弓之助しゆげつゆきゆうしょが娘むすめとかや、今改かわて夫婦ふうふとなさん我目通りがのぞで祝しゆく言いせよ、レ用意ようびと御下ごした知し、はつと答こたへて持出もろなる長柄なががらの銚子とろし蝶花形千代ちょうはながたも替かわらぬ高砂たかさごの尾お上の松まつこそめでたけれ、悦えひ納なる其所ところへ様子さまをとつくと岩代多喜太いわしろたきた、一間いつばんの内うちよりのさぱり出だ、開目くらこじきの朝顔あさがほも、今いまで武家の御内賓ごうちひん前代未聞まんだいみもんの此せんざく、アリヤ拙者しょくしゃも罷はて又後刻御祝儀申まことさん駒澤殿こまつだいと、何なにがな意地おこだ持詞もちことを残のこし立歸たきらんとする所ところへ、ア大友おほとも一味ひとの反逆はんぎやく人ひとそこ動うごなど、呼よかけられ、憚のりふり向むか其所ところへ、ア次郎左衛門じらうざゑもん殿暫ときくお扣く下さるべし駒澤三郎こまつさんろう春次しゅんじ、夫めへ參まいつて明白めいめい又申上しんじやうんど、云いつ

し出る若侍見るる岩代詣寄てヤ汝ハ幼少の時逐電玄たる駒澤了庵が  
實子庄一郎シテ其方が證人といボ某日外摩耶が嶽みて浮洲の仁三と仮  
名しく大友ニ付隨ひ術を持て打亡し薬玉樹を奪返し守護し奉りて國  
元へ立歸其砌播州舞子の濱の松原よく山岡玄番も其方へ内通の飛脚  
ニ出合々上て狀箱引取よくく見られバ汝が工み又先刻其方が懷中より  
取落したるヨレ此一通開き見れば山口へ合体玄たる惡事の次第委繩又  
知たる此文体日外島田の宿みて浪人を語らひ下やヘ忍バせ置毒藥を  
持て某を害せんと計る人非人何と是でも返答有やザそれハ此書面の  
云譯有やサ夫ハサアく返答いかゝ岩代と流るし水の辨舌も實駒澤了  
庵が子息とこそハ志られけり岩代ハ破れかぶれモ是迄と拝放し切て  
懸るを關介隔駒澤様へ目見ヘヨ己が首ハ此奴が婚禮の祝儀も賀

なたも心得渡り合、暫く時をぞうつしける、先を取れて岩代いたぢろく所を付入て、苦もなく首を打落せば、謂出かしたく、關助とやら下郎ながらも通あつわれういやつ以後、三百石を與へ侍々取立吳ん又庄一郎の今食、駒澤了助と名を改、猶忠勤おほちきんをはげむべしと殘る方なき大將が仰よふ人ひと、慶儀けいぎの感涙智仁勇有君子國かんるいちじんゆうゆうじゆこく例たとを爰よ々竹本の、其一ふしよ千代せんじよこめて語かた傳つたへし物語文才青き翠松みどりかはらぬ色の若枝を、ならさぬ後代こうだいぞめでたけれ

嘉永三載 戊正月 發板

增補 生寫朝顔日記 終

明治廿四年一月十五日印刷  
明治廿四年一月十六日出版

發編輯兼

日本橋區通四丁目四番地  
内藤加我

印刷者

日本橋區新和泉町壹番地  
瀧川三代太郎

發兌

金櫻堂

日本橋區通四丁目四番地

